

神垣外遺跡

—— 団体営土地改良総合整備事業田沢地区に伴う
埋藏文化財緊急発掘調査報告書 ——

1992

茅野市教育委員会

神垣外遺跡

—— 団体営土地改良総合整備事業田沢地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1992

茅野市教育委員会

はじめに

茅野市には300を越える遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。宮川地区には、市内全域に見られる縄文時代中期の遺跡の他にも、様々な時代の遺跡が多く分布しています。その多くは山の中腹に築かれた古墳であったり、山裾の平地に営まれた奈良・平安時代の集落です。

今回、宮川の田沢地区で団体営による土地改良総合整備事業が実施されることとなり、以前から遺跡として知られていた神垣外遺跡の発掘調査を事前に行うことになりました。調査は2ヵ月以上におよび、中世の多くの遺構を発見するという成果を得ることが出来ました。

神垣外遺跡で発見された中世と言う時代は、鎌倉・室町時代を指します。茅野市内でも諏訪神社や上原城周辺では中世の遺跡は見つかっていますが、その他には宮川の御社宮司遺跡や豊平の山寺遺跡など数えるほどしかありません。その中にあって神垣外遺跡は、この中世の庶民の村落を代表する大きな規模の遺跡であったことが明らかとなりました。

既に遺跡は消滅してしまいましたが、遺跡の全容は本報告書にまとめられました。本書が考古学の研究に役立つことを願っております。

最後になりましたが、発掘調査に協力いただいた地権者はじめ地元田沢区の皆さん、調査に参加された方々に心から感謝いたします。

平成4年3月

茅野市教育長 両角昭二

例　　言

1. 本書は、長野県茅野市宮川田沢地区の団体営土地改良総合整備事業に伴う神垣外遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成3年9月30日から12月6日まで行った。
4. 発掘調査における記録及び整理は、下記の調査員及び調査補助員が行った。
5. 本書の原稿執筆は、調査員の小池岳史と小林深志が協議の上、それぞれ分担して行った。文責については文末に示した。
6. 遺構図版及び表中で、遺構の名称に略号を用いてあるが、方は方形竪穴、地は地下式横穴、土は上坑、土間は土間状遺構の略である。
7. 出土品・諸記録は、茅野市教育委員会文化財調査室で保管している。
8. 整理作業において次の方に指導・助言を得た。記して感謝致します。

気賀沢 進、小高春夫、武藤雄六、小林公明、樋口誠司、田中 基

文化財調査室

室長 長田 篤

係長 鵜飼幸雄

主任 両角一夫

調査員 守矢昌文、小林深志、功刀 司、小池岳史、伊東みゆき（嘱託）、百瀬一郎（臨時）

発掘参加者

調査・整理補助員 武居八千代、占部美恵、牛山市弥、牛山徳博、堀内 澄

発掘作業員 武居行雄、武居久子、武居幸子、吉田幸子、藤森静子、藤森清子、坂本清明、

坂本孝子、坂本大策、坂本とし、牛山敏明、本山みさ子、牛山静子、伊藤千代美

整理作業員 白旗スエ子、目黒恵子、長田ツギ、矢野聰美、金子清春、小平長茂、杉本裕子、

赤堀彩子

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

本遺跡は茅野市宮川田沢神垣外に位置する。遺跡名の神垣外（かみがいと）は字名からとったが、地元では「かみがきど」とも呼んでいる。また、神垣外と呼ばれる地区はかなり広い範囲にわたっているが、様々な字を持つ地区を合せたもののように、調査を行った範囲は蔓根（ツルネ）とも言われている。

茅野市内を流れる河川は、八ヶ岳山麓と霧ヶ峰山塊の間を流れる上川水系と、八ヶ岳山麓と守屋山系の間を流れる宮川水系の二つに大きく分けることが出来る。共に北上して諏訪湖に至る。八ヶ岳山麓から宮川に流れ込む河川の中では、弓削川・田沢沢川が最も北に当たるが、この両河川に挟まれた台地上に本遺跡は立地する。標高は約870mで南北の低地からは5~6mの比高差がある。この比高差は、標高が高くなるにしたがって徐々に縮まり、標高890m付近で一旦同じくらいとなる。また、台地の南斜面は、約1/4が人家を建てるために削平され、失われている。

旧田沢村は鎌倉時代の初期には文献に名前が出てくる古村で、これより東南にある宮川丸山と、北方にある玉川北久保は、共に田沢村を親村とする新田村である。現在の田沢地区的集落は本遺跡の存する台地の南斜面と、更に南の台地にかけて広がっており、本遺跡の立地する台地上は畑地として利用されていた。隣接する西側の台地から斜面に掛かるところは墓地として利用されている。

本遺跡は茅野市の遺跡台帳ではNo180に登録されており、一帯から土師器や内耳土器が採集されている。昨年、調査に先立つ下見で本遺跡を訪れた際にも縄文時代と考えられる黒曜石片、平安時代の土師器片、中世と考えられる内耳土器片、石臼片等が採集出来た。今回、調査に先立って畑内を歩いたところでは、内耳土器片が多く採集された他、1点だけであるが、縄文時代中期初頭の土器片も採集することが出来た。昨年から今年の初めにかけて、本遺跡の北側の台地にある玉川北久保の古御堂遺跡の調査が行われたが、そこからは縄文時代の中期初頭から前半にかけての住居址が8軒と、平安時代の住居址1軒が検出されている。のことから、地形的にもほぼ同じような立地があるので、中世の遺構の他にも、縄文時代や平安時代の集落があるのではないかと考えられた。

第Ⅱ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法と調査区の設定

本遺跡の調査は、対象となる面積が広いため、重機による試掘調査を最初に行い、遺跡の広がりや遺構の分布・密度を見ることにする。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

試掘調査は遺構の分布が多いと予想される台地の南斜面で当日まだ作物の取入れを行っていたため、北側斜面の西側から掘り下げを行った。試掘調査にあたっては台地中央を東西に走る作業用の道路が走っており、作物の取入れに使用していたため、しばらくこの道路を残しておくこととする。そのため調査区を南北2地区に分け、それぞれ2m幅のトレンチを4m間隔で南北に開けていく方法を取ることにしたが、台地先端は狭くなってしまい、南北のトレンチを開けることが出来なかつたので、東西方向のトレンチを開けることとした。試掘調査において各トレンチを呼称するについては、北側斜面の西端を1トレンチとし、順次番号をつけた。北斜面は30トレンチまで掘り下げたが遺構は5トレンチから土坑が検出され始め、20トレンチまでで遺構が検出されなくなつた。

南斜面は重機の搬出の関係で東側からトレンチを開け始めた。トレンチの名称については、引き続き31トレンチから命名することとした。南斜面は40トレンチで1.5~1.8m幅の大きな溝が検出されたが、それより東側には遺構の検出はなかつた。北斜面に土坑が多く検出されたのに対し、南斜面では遺構の量は少ないものの、住居址状の大規模な掘り込みが2ヵ所検出されたり、土間状遺構の検出があるなど、北斜面と大きく異なる様相を呈していた。

試掘調査の結果、当初の予想を大きく上回る広い範囲に遺構の分布が見られ、その量も土坑を中心に150基をはるかに越えるものと考えられた。そこで市農業基盤整備課と協議の上、約6,000m²を調査の対象とすることとした。

本調査では、当初全面を一度に調査するには魔土の置き場が足りなくなると考えられたため、遺跡を東西に分け、最初に東側の調査を行い、調査が終了次第西側の調査を行うこととした。

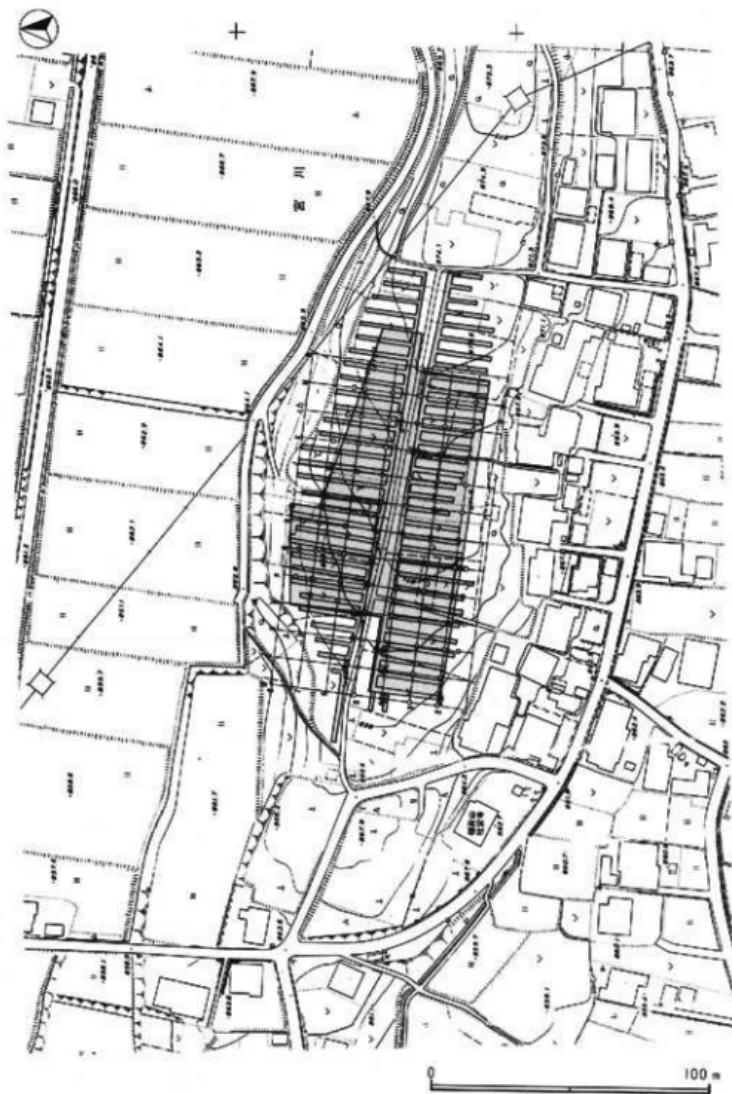
遺構の実測に際しては、各遺構の位置関係を明らかにすることが出来るように、調査区全体にグリッドを設定した。調査区は地形に沿って設定したが、面積が広範にわたつたため、まず1辺が10mの大グリッドを設定し、南北隅を基点にX軸を大文字のアルファベット、Y軸を数字で呼称した。その中を更に1辺が2mの小グリッドを設定し、X軸を小文字のアルファベット、Y軸を数字で呼称することとした。したがつて各小調査区はA1 a 1のように呼称する。調査区のY軸の軸線方向はN-6°52'-Eを指す。

第2節 調査の経過

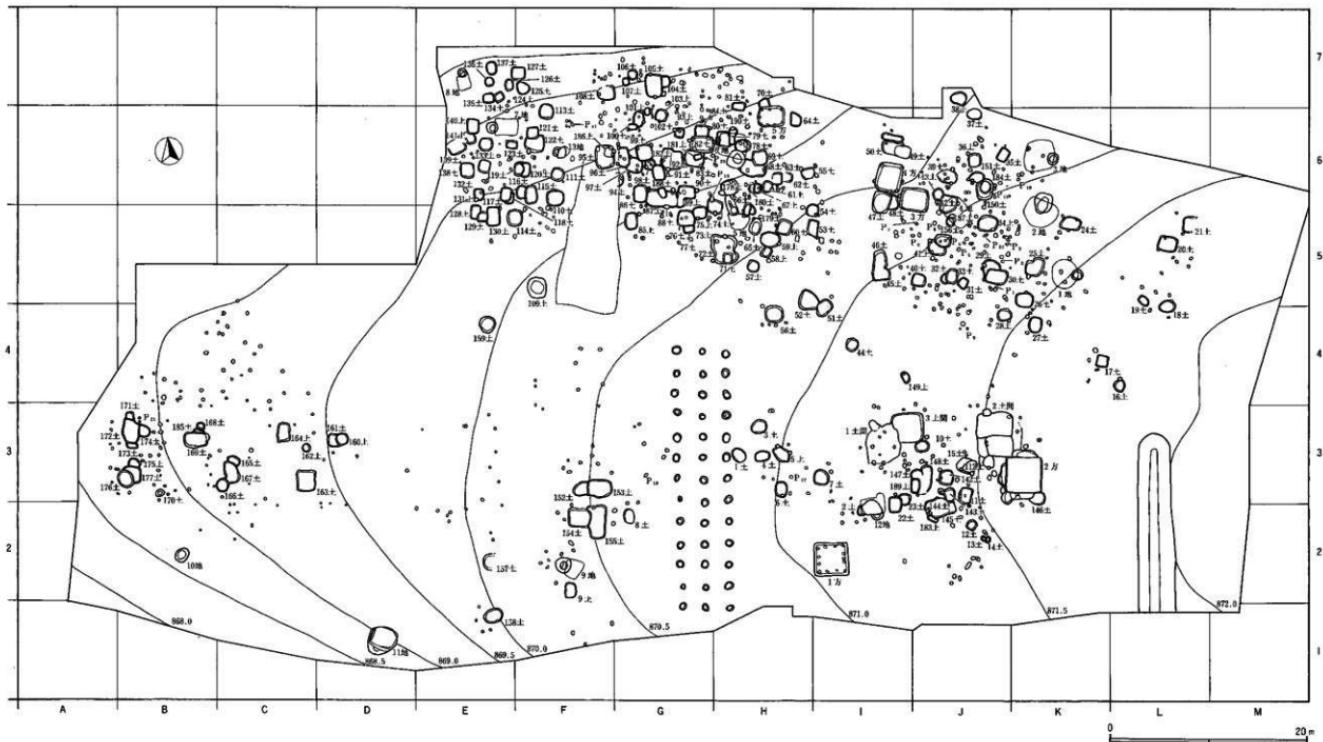
調査は平成3年9月30日から開始した。

遺構の検出作業は10月4日から行った。8日になって地元田沢区の方々が作業に加わり作業がはかどつたため、平行して遺構の掘り下げも開始する。土坑は平面での確認時にはきれいなプランが認められるが、深さは以外と浅く、10cmに満たないものも多かった。北側斜面では、地下式横穴と考えられる落込みが2基検出されたが、重機による表土層の除去に際して、天井部が一部崩落しているのが観察された。

遺構の実測作業は、当初実測班が1組しか作れなかつたため、遺構の半裁と上層断面図の作成



第2図 地形と発掘区域 (1/2,000)



を先に行うこととし、完掘作業と平面図の作成はすべての遺構の半数が終了してから行うこととする。

表土層の除去は、当初考えていたより土量が少なかったため、西側半分の表土も一度に剥ぐこととなった。調査予定範囲の全体の遺構精査を行った結果、最も遺構の検出が多いと予想された南西隅には以外と遺構は少なく、土坑が幾つか検出されただけであった。それに比して、遺構の検出は少ないであろうと予想された北側斜面で100基を越える土坑が検出されたのは予想外であった。また、遺跡内の各所で地下式横穴が検出され、総数が13基を越えたことも予想外の成果であった。

遺構の半数は10月末までかかって終了し、完掘作業に入る。引き行っていた土層断面図の作成も11月6日には終了し、遺構平面図の作成に取り掛かった。また、8日には遺構の清掃と写真撮影を開始した。

本遺跡内からは、幾つかのピットが検出され、掘立柱建物址の存在が予想されていた。11月の後半になって、土坑などの遺構の完掘作業が終了した後もピットの検出作業を継続し、多くのピットを確認することが出来た。

12月6日には遺構平面図の作成と、これと平行して行っていた清掃作業の後の遺跡の全景写真的撮影を終了し、機材を搬出して、調査のすべてを終了した。検出された遺構には、方形竪穴5基、地下式横穴13基、土間状遺構3基、土坑190基、ピット多数、柱穴列、溝跡がある。

整理作業は12月の後半から開始し、3月まで行った。

この間、11月24日に開催した遺跡現地説明会には、地元田沢区の人々を中心に各地から70名余が参加した。また、諒訪考古学研究会が2月11日に諒訪市で開催した「諒訪地区遺跡調査研究発表会」でも調査員が発表し、注目を集めた。

第III章 遺構と遺物

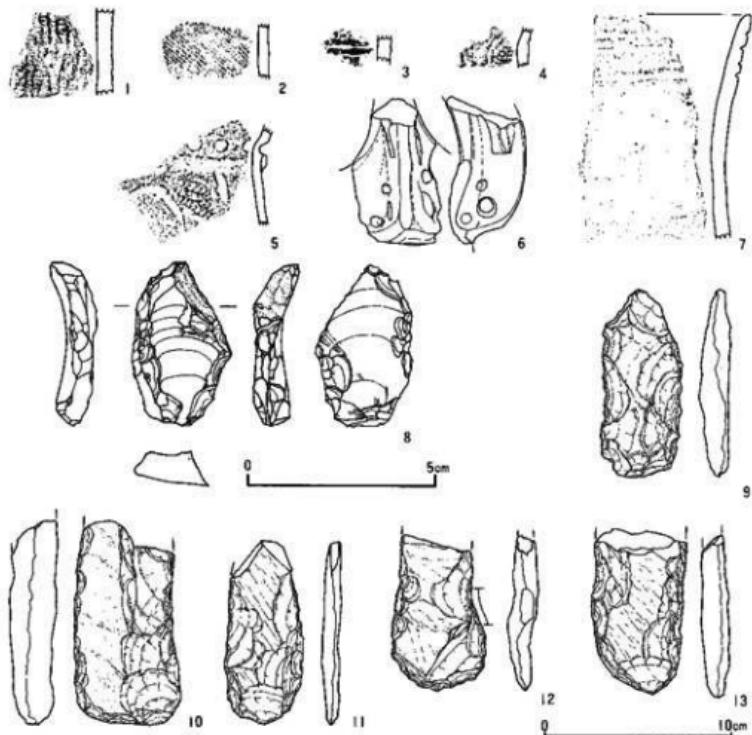
第1節 繩文時代

本遺跡からは縩文時代と考えられる遺構は検出出来なかつたが、遺物は表面採集、あるいは他の時期と考えられる遺構から出土している。

縩文土器（第4図1～7）

1は縩文が施されている。2は条痕文が施される。3は竹管により平行沈線が横位と縦位に施されている。4・5は沈線と区画によっている。5に施されている円形の刺突は6の把手部にも見られ、同一個体と考えられる。7は胴部が無文で、口縁部に横位に平行沈線が施されている。

1・2の時期は不明である。3は中期初頭、4～6は後期に、7は晩期に比定されようか。



第4図 繩文時代の遺物 (1/3, 8は2/3)

石器 (第4図 8~13)

8は両側刃に急角度の調整が施される。先土器時代の遺物の可能性もあるが、表採のためはっきりしたことは言えない。

本遺跡からは打製石斧が5点出土している。10~13は基部が欠損している。11が176号土坑、12が12号土坑の出土で、他は表採である。土坑出土のものについては、土坑が中世以降のものと考えられ、土石と共に流れ込んだものと思われる。点数は5点を数えたが、縄文時代の遺構が検出されなかったこと、土器の出土状況や量から見て、この点数が多いと言える。打製石斧が上掘り具ではないかと言われていることを考えると、この地が集落としてではなく、畑などの耕作の場であったと考えた方がよさそうである。

第2節 平安時代

本遺跡からは、平安時代と考えられる遺物が幾つか出土している。量はごく僅かで、それに伴うと考えられる遺構は検出されていない。遺構からの出土のものについても、遺構の年代や遺物の出土状況から土石と共に流れ込んだと考えてよいであろう。遺物には、土師器甕、内面黒色處理した土師器壺、灰釉陶器皿・碗・瓶がある。図示した灰釉陶器（第28図1・2）は1が173号土坑出土の甕で、口径11.7cm、底径6.9cm、器高2.2cm、2が11号地下式横穴出土の壺で底径7.8cmを測る。なお、1の出土した173号土坑はこの1点が出土しているだけであるが、他に平安時代の遺構の出土がないため、中世の遺構としてある。

（小林）

第3節 中世

I 遺構

検出された遺構には、方形竪穴、地下式横穴、土間状遺構、土坑、ピット、柱穴列、溝址がある。これら遺構の所属時期については、出土遺物等から、多くは中世に属するものと考えられるが、近世の遺物や、極めて新しい遺物も出土していることから、近・現代に属する遺構も含まれていると考えられる。しかし、近・現代と考えられる遺構は、検出された遺構の総数に対して僅かで、中世に属する遺構が大半を占めているものと考えられる。また、遺物の見られなかった溝址のように、所属時期を決定出来ない遺構もある。しかし、この溝址の東側からは中世の遺構が検出されていないことから、各遺構と同時に存在し、他地区と明確に区分するために掘られたのではないかと考えられる。

(I) 方形竪穴

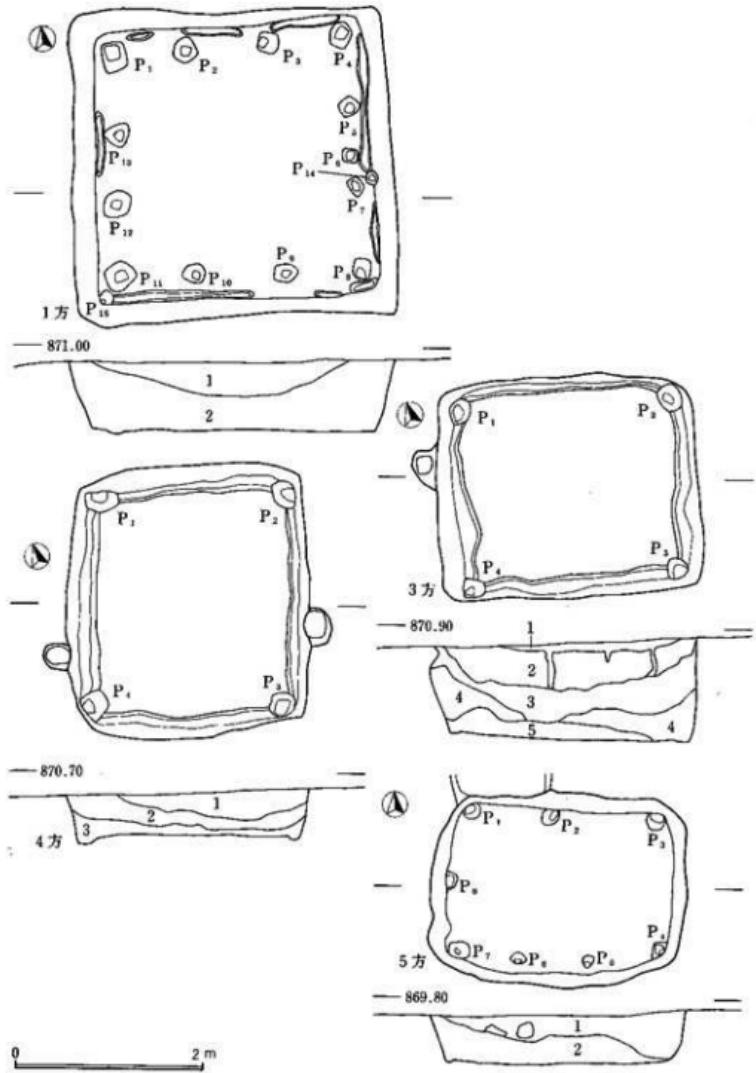
本遺跡からは方形竪穴が5基検出された。南斜面で検出された2基の方形竪穴は、北斜面で検出された3基の方形竪穴に比べて大型である。検出された方形竪穴のすべてに共通する点は、形態が方形ないし長方形を呈し、一定の深さの掘り込みを持つこと。そしてがやカマドを持たないこと。また人為的に埋め戻されたと考えられる層があること等が上げられる。

以下、各方形竪穴について述べる。床面に柱穴のあるものは、北西隅から時計回りにP₁・P₂と柱穴番号を付した。1号方形竪穴のP₁₄・P₁₅については、主柱穴と副柱穴の配置からずれているため、後に回すこととした。

1号方形竪穴（第5図）

本址はI-2グリッドで検出された。調査当初は平面プランとその規模から竪穴住居址を想定した。しかし出土遺物の少なさと、炉やカマドがないことから直ちに住居址とは考えられず、形状は方形で床面に柱穴と周溝を持つことから方形竪穴とした。

本址の平面形態は方形で、底面形態も東にやや広がる方形を呈す。平面長軸340cm・平面短軸325cm、底面長軸・底面短軸は共に290cm、深さは75cmを測る。長軸方向はN-82°-Wを示す。壁は堅



第5図 方形豎穴(1) (1/60)

くしっかりとした、やや急な傾斜を持つ良好なロームの壁である。

壁面には、工具痕は確認出来なかった。周溝は全周しておらず、深さは1~5cmで幅は一定していない。床面は堅鐵で、若干の凹凸が見られる。柱穴は13個検出され、P₁・P₄・P₈・P₁₁が主柱穴、P₂・P₃・P₅・P₆・P₇・P₉・P₁₀・P₁₂・P₁₃が副柱穴と考えられる。主柱穴は四隅にあり、北・南・西辺の間では2本の副柱穴が75~90cmの間隔を持ってほぼ規則的に並ぶ。東辺は不規則な間隔を持ちやや小規模な副柱穴P₅・P₆・P₇があり、出入り部の様相が窺える。その他性格不明のピットP₁₄・P₁₅が南東隅と東辺の中央に2つ検出された。床面からの柱穴の深さは、主柱穴P₁が31cm、P₄が31cm、P₈が36cm、P₁₁が27cmを測る。副柱穴は、P₂が23cm、P₃が23cm、P₅が14cm、P₆が14cm、P₇が14cm、P₉が19cm、P₁₀が16cm、P₁₂が19cm、P₁₃が20cmを測る。性格不明のピットP₁₄・P₁₅は、深さ8cmと6cmを測る。

覆土は2層に分けられた。土層断面では、南北の壁下付近に10cm程度のロームブロックが混入する堆積状態から、3層に分層出来そうであった。しかし東西に設けた土層断面では、南北隅で観察されたロームブロックを上回る20cm程度のロームブロックがかなり高い位置にも見られたことから2層に分層した。堆積状態はレンズ状であるが、ロームブロックの混入状態から、自然堆積というよりも人為的に埋められたと考えられる。埋め戻された時期については、遺構が掘られすぐに埋め戻された可能性と、ある程度時間が経てから埋め戻された可能性が考えられる。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、良く締まっているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量含む。ロームブロックは2mm~2cm程度のものを少量含むが大きいものは稀である。7mm程度の炭化物を少量含み、礫の混入はない。2層は暗褐色土で粒子は細かく、締まりがあり、若干の粘性を持つ。1mm以下のローム粒子と、2mm~7cm程度のロームブロックを多く含む。5mm程度の炭化物を少量含み、礫の混入は見られない。

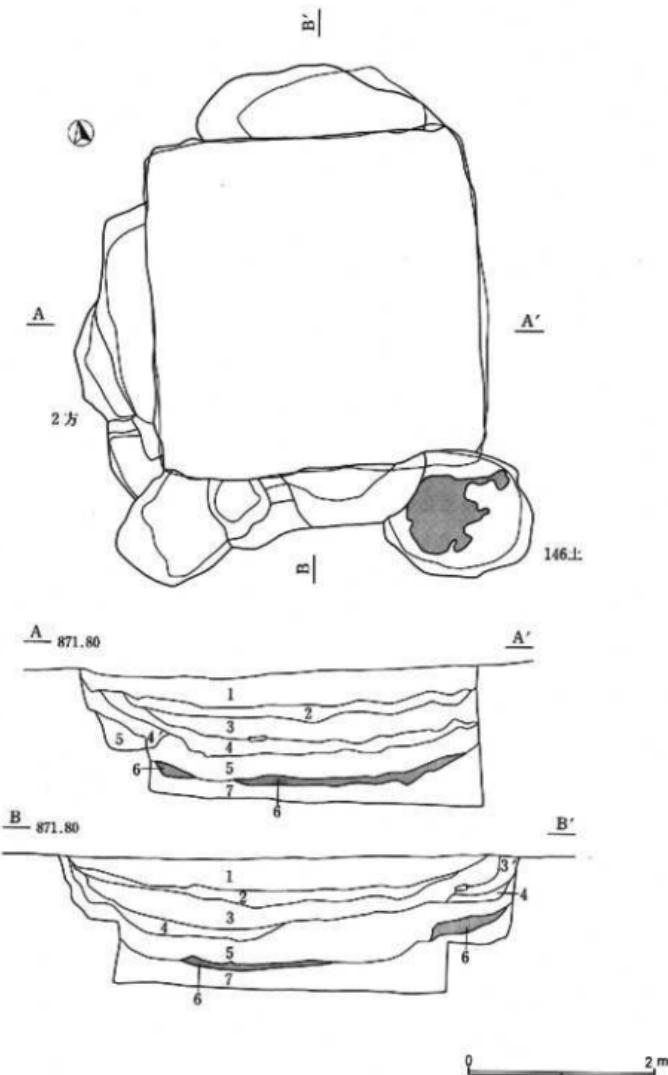
遺物は砥石と近世陶磁器が出土しただけである。

2号方形竪穴（第6図）

本址はJ-3・K-3グリッドで検出された。検出時にはその平面形から複数の遺構が絡んでいたと考えられた。調査の結果、方形で東壁を除く三壁の中央に深さ70~95cmの掘り込みのある遺構であることが確認された。また南壁の東側に焼土の混じった覆土を含む土坑が重複していることも確認された。床面には柱穴と周溝は見られないが、形状や規模から方形竪穴とした。

本址は東壁を除く三壁に掘り込みがあるが、東西及び南北に設けた2本の土層断面からは、この掘り込みが別の遺構とは考えられない。しかし、どのような目的で掘り込まれたかはっきりしない。南壁の東側で検出された焼土を伴う146号土坑は、土坑内に堆積した焼土が2号方形竪穴にまで及んでいないことから、本址の方が146号土坑よりも新しいと考えられる。

平面形態は方形で、平面長軸・平面短軸は共に350cmと推測され、底面形態は方形を呈し、底面長軸360cm・底面短軸350cmを測る。深さは145cmを測る。長軸方向はN-7°-Eを示す。壁は床面から袋状ないし直に立上り、それぞれの掘り込みに至る良好なロームの壁である。壁面の観察で、



第6図 方形竪穴(2) (1/60)

東壁だけに工具痕が確認された。床面には柱穴と周溝はなく、堅継で凹凸が著しい。

覆土は7層に分層出来た。1層は黒灰褐色土で、粒子は細かく、締まりはあるが、粘性はなくバサバサしている。1mm以下のローム粒子と2mm～1cm程度のロームブロックが少量混入する。礫は3mm程度のものを少量含み、5mm程度の炭化物が稀に混入する。2層は1層と同様の土色と粒子である。ローム粒子も1層と同様であるが、ロームブロックは2～7mm程度と小さく、稀に混入する。炭化物、礫はない。3層は南北に設けた土層断面の北隅で、更に2層に分けられ、これを3'層とした。3層は黒色土が斑状に混入する黒褐色土である。粒子は細かく、良く締まっているが、粘性に乏しい。1mm以下のローム粒子と2mm～2cm程度のロームブロックを少量含む。7mm程度の炭化物が少量混入し、3層と4層の境に20×5cmの礫が1つと、3mm程度の礫が少量混入している。なお、本址の西壁際に2mm程度の焼土粒子が混入する。3'層は土色、粒子は3層と同様であるが、1mm程度のローム粒子と2mm～1.5cm程度のロームブロックを3層より多く含む。礫と炭化物の混入はない。4層も東西に設けた土層断面の西隅において、2層に分層出来4'層とした。4層は黒色土で粒子は細かく、締まりはあるものの、粘性はない。1mm以下のローム粒子を微量含み、2mm～1.5cm程度のロームブロックを少量含む。礫はなく、5mm程度の炭化物が少量見られる。4'層は5mm～1cm程度の焼土塊を含む暗褐色土で、粒子は細かく、締まりはあるが、粘性に乏しい。1mm以下のローム粒子と、2mm～1cm程度のロームブロックを少量含む。礫はなく、5mm程度の炭化物が僅かに見られる。5層は黒褐色と暗褐色の中間色土で、粒子は細かく、締まりはあるが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含み、2mm～5cm程度のロームブロックを少量含む。大きなロームブロックは實際に集中する。また、西壁際に濁ったロームが観察された。炭化物、礫の混入は見られない。6層は青灰色の粘土塊を多量に含む黒褐色土である。粒子は細かく、良く締まっており、強い粘性を持つ。1mm以下のローム粒子が多量に混入し、2mm～3cm程度のロームブロックが少量混入している。炭化物、礫の混入はない。7層は、5層よりも黒みの強い黒褐色土である。粒子は細かく、良く締まっており、強い粘性を持つ。1mm以下のローム粒子と、2mm～5cm程度のロームブロックが多量に混入し、5mm～1cm程度のロームブロックは壁際に集中する。炭化物、礫の混入は見られない。

6層に見られた粘土塊は約8kgに及ぶ。大きさは5mm程度のものから拳大まで幅があり、1cm前後の礫を多く含んでいるため、そのままでは成型が不可能と考えられる。粘土塊は調査時の観察で、層位的に堆積している状態が確認された。産地は西山赤石山系のものと考えられ、遺跡周辺で粘土が採取出来る場所もないことから、本址が使用されなくなつてから、あまり時間の経たないうちに人為的に投げ込まれたものと考えられる。

本址からは、内耳土器・カワラケ・石鉢・銭貨が出土している。

3号方形窪穴（第5図）

本址はI-5・6、J-5・6グリッドで検出された。確認面では、長方形の落ち込みのなかに多量のロームブロックが見られたため、攪乱を受けているとも思われたが、調査の結果、長方

形の掘り込みが検出された。床面に柱穴、周溝が見られ、炉やカマドがないことから方形竪穴とした。

本址の平面形態は方形より長方形に近く、底面形態も同様である。平面長軸275cm・平面短軸240cm、底面長軸250cm・底面短軸225cm、深さは110cmを測る。長軸方向はN-76°-Wを示す。西壁の遺構確認面上にピットが検出されたが、確認面で本址との切り合いが観察されたことから、本址に伴うものとは考えられない。西壁の一部は袋状を呈するが、他の三辺は床面から直立し、いずれの壁も堅く良好なロームの壁である。壁面には工具痕は確認出来なかった。周溝は、深さ2、3cmで一定の幅を持ち全周している。床面は平坦で、全面が堅緻である。柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本が床面の四隅で検出された。床面からの深さは、P₁が11cm、P₂が5cm、P₃が4cm、P₄が6cmを測り、他の方形竪穴に比べ浅い柱穴である。

覆土は5層に分層された。1層は黒灰色土で、粒子は細かく、縮まりはあるが、粘性に乏しい。1mm以下のローム粒子と、2mm～1cm程度のロームブロックを少量含む。5mm程度の炭化物が少量見られるが、礫の混入はない。なお、本層上面には一部焼土が見られたが、本址に伴うものかは不明である。2層はロームブロックが多量に混入し、その間に僅かの暗褐色土が見られる層である。このロームブロックが遺構確認面に見られたものである。層全体が非常に良く縮まっており、掘り下げ時には床面と間違えるほどであった。3層は、暗褐色土が斑状に混入する黒褐色土である。粒子は細かく、縮まりはあるが、粘性はない。1mm以下のローム粒子と、2mm～3cm程度のロームブロックを少量含む。礫はなく、3mm～1cm程度の炭化物が混入する。4層は黒褐色土で、粒子は細かく、良く縮まっており、粘性も強い。1mm以下のローム粒子を少量と、2mm～7cm程度のロームブロックを多量に含む。炭化物、礫は共にない。5層は暗褐色土で、粒子は細かく、良く縮まっており、強い粘性を持つ。1mm以下のローム粒子を少量と、2mm～1cm程度のロームブロックを多量に含む。5mm程度の炭化物が少量混入するが、礫は見られない。

本址の2層で観察された多量のロームブロックについて少し触れてみたい。調査時には、本層の上面が堅緻であったことから床面とも考えられる。しかし、暗褐色土がロームブロックの隙間に混入していたため、引き続き掘り下げを行った。その結果、55cm下に柱穴と周溝を持つ床面を検出した。本層はロームブロックの貼床とも考えられるが、全面に著しい凹凸を持つことや踏み固められた様子も窺えない。埋め戻された時期については、掘り下げ直後なのか、ある程度時間が経った後に埋め戻されたのか不明である。また、4層は、東壁際に多量のロームブロックが混入している状態が観察された。本址の東壁が崩れた様子もないことから、4層も2層と同様に人为的に埋められたと考えられる。しかし時期の特定は出来ていない。

遺物の出土は多く、内耳土器・カワラケ・青磁・砥石・編物石・刀子・鉄釘・錢貨の他、平安時代の灰釉陶器瓶が出土している。

4号方形竪穴（第5図）

本址はI-6グリッドで検出された。3号方形竪穴に比べて浅いが、規模がほぼ同様であり床

面には柱穴と周溝が見られ、炉やカマドがないことから方形竪穴とした。

本址は平面形態、底面形態共に北東及び南東隅がやや張り出す方形に近い長方形を呈す。平面長軸295cm・平面短軸255cm、底面長軸260cm・底面短軸230cm、深さは50cmを測る。長軸方向はN-16°-Eを示し、3号方形竪穴の長軸方向に対して東側にはほぼ90°のずれを示す。東西壁の造構確認面上には2つのピットが検出されたが、平面の観察で本址がピットを切っていたため、本址に伴うものではないと考えられる。壁は堅くしっかりと直に近いロームの壁が全周する。壁面に、工具痕は見られなかった。周溝は2~10cmの深さを持ち、壁下を全周している。床面は堅緻で、平坦である。柱穴は床面の四隅にあり、それぞれ周溝とつながる。床面からの深さは、P₁が35cm、P₂が25cm、P₃が28cm、P₄が28cmを測る。このなかでP₁だけは袋状を呈している。

覆土は3層に分層出来た。1層は黒色土が斑状に入る黒褐色土である。粒子は細かく、良く締まっているが、粘性に乏しい。1mm以下のローム粒子と、2mm~1cm程度のロームブロックが共に少量混入する。また1cm程度の焼けたロームブロックが2、3個観察された。炭化物は5mm~1.5cm程度のものが少量混入し、2mm程度の礫が微量混入する。2層は、暗褐色土で、粒子は細かく、良く締まっているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子と、2mm~3cm程度のロームブロックが多量に混入し、共に西壁際に集中している。5mm~1cm程度の炭化物を少量含むが、礫は見られない。3層は1層より黒みの強い黒褐色土であるが、西壁に向かって黒みが薄くなる。粒子は細かく、良く締まっており、僅かな粘性を持つ。1mm以下のローム粒子と、2mm~2cm程度のロームブロックを少量含むが、2cm程度のロームブロックは西壁際に多い。2mm~2cm程度の炭化物を多量に含むが、礫は含まない。

2層の西壁際にロームブロックの多い状況が見られたが、西壁が崩落した様子もないことから、人為的なロームブロックの投げ込みと考えられる。しかし、埋め戻された時期の特定は出来ていない。

本址からは、内耳土器・カワラケ・石製円盤・錢貨が出土している。

5号方形竪穴（第5図）

本址はH-6・7グリッドで検出された。ロームブロックを含む不整形の落ち込みから、2つの造構が絡んでいると考えられた。調査の結果、長方形の掘り込みと、その北側に土坑が1基重複していることが確認された。床面には周溝はないが柱穴があり、炉やカマドを持たないことから、方形竪穴とした。

本址の平面・底面形態は南側にやや膨らむ長方形を呈し、平面長軸270cm・平面短軸210cm、底面長軸240cm・底面短軸175cm、深さは50cmを測る。長軸方向は、N-83°-Wを示す。本址の北側には70号土坑が重複している。平面での観察では、70号土坑が本址を切っていたため、本址よりも新しいと考えられる。壁はやや急傾斜の堅い良好なローム壁である。壁面に工具痕は確認されなかった。床面は僅かな凸凹を持つが、堅緻である。床面に周溝は見られないが、8本の柱穴が検出された。四隅にある柱穴P₁・P₂・P₃・P₄は主柱穴と考えられ、床面からの深さは、P₁が30

cm、P₃が20cm、P₄が53cm、P₇が34cmを測る。柱穴P₂・P₃・P₄・P₈は副柱穴と考えられ、床面の北辺と西辺には1本、南辺には2本見られるが、東辺では検出されなかった。副柱穴の在り方から、出入口部は東側の可能性を考えられる。副柱穴の深さは、床面からP₂が11cm・P₃が25cm・P₄が18cm・P₈が13cmを測る。

覆土は2層に分けられた。1層は黒色土が斑状に混入する黒褐色土である。粒子は細かく、締まりはあるが、粘性はない。1mm以下のローム粒子と、2mm～3cm程度のロームブロックが多量に混入する。5mm程度の炭化物と、3mm程度の礫を共に少量含む。2層は黒褐色土で、粒子は細かいが、締まりがなくボソボソしており、粘性はない。1mm以下のローム粒子と、2mm～2cm程度のロームブロックが少量混入する。炭化物はないが、5mm程度の礫が少量見られる。

本址においても、ロームブロックが多量に混入する状態が1層で観察された。2層は、ロームブロックの少ないことから自然堆積と考えられるが、1層は他の方形竪穴の各層と同様に人為的に埋められたと考えられる。

遺物は、内耳土器・青磁・陽石・砾石の他、平安時代の内黒土器が出土している。

(2) 地下式横穴

本遺跡からは地下式横穴が13基検出された。すべての遺構はローム層を掘り込んで造られている。遺跡内における地下式横穴の分布は、台地の北斜面と南斜面とに分かれる。北斜面では9基、南斜面では4基検出された。造られた当時のままで検出された地下式横穴は5基で、その他は天井部が崩落している。2、3の地下式横穴を調査し終えた時点で、地下式横穴の覆土が締まりのない黒灰色土で、土坑の良く締まった覆土と明らかに違うことに気付いた。そのため遺構確認面でも、ある程度予測することが出来た。

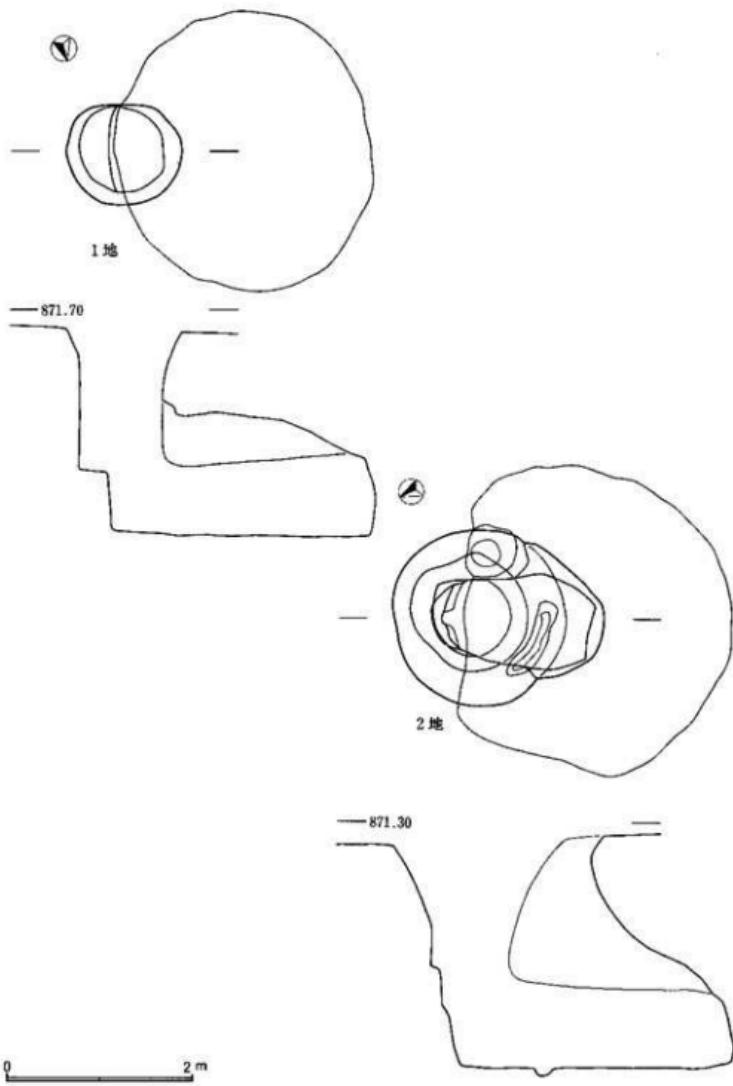
1号地下式横穴（第7図）

本址はK-5グリッドで検出された。開口部の平面形態は円形を呈し、長径120cm、短径107cmを測る。竪坑部の断面形態は直立状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは152cmで、室部床面までの深さは215cmを測る。室部は西へ延びており、形態は円形を呈す。室部の規模は幅が298cm、奥行が271cmを測る。天井部は崩落しているが、壁から天井へかけての傾斜から、室部の高さは89cmと推測される。

出土した遺物には内耳土器・石臼・近世陶磁器がある。すべての遺物は土石と共に流れ込んだと考えられる。

2号地下式横穴（第7図）

本址はK-5・6グリッドで検出された。重機による表土層の除去の際に、天井部が一部崩落し、空洞の見られたことから、その存在が明らかとなつた。開口部の平面形態は、現存する開口部の平面形状から、長径190cm、短径185cmの円形を呈していたと考えられる。また竪坑部の断面形態は、ロート状を呈していたと考えられる。確認面から足掛けまでの深さは133cmで、室部床面までの深さは242cmを測る。室部は南西へ延びており、形態は不整円形を呈す。室部の規模は幅が



第7図 地下式横穴(1) (1/60)

312cm、奥行が285cmを測る。天井部は大規模な崩落を受けているが、壁から天井へかけての傾斜から、室部の高さは94cmと推測される。床面の入口左脇には長径55cm、短径50cm、深さ37cmを測るピットがある。またピットの西には幅20cm、長さ89cm、深さ9cmの溝が検出された。

出土した遺物には内耳土器・捏鉢・石鉢・刀子・近世陶磁器がある。遺物は遺構内に流れ込んだ覆土からの出土であることから、本址に伴うものではないと考えられる。天井部の崩落は、近世陶磁器の出土点数が他の遺物をはるかに上回ることから、重機の重みによる崩落のほかに、古い時期の崩落も考えられる。

3号地下式横穴（第8図）

本址はK-6グリッドで検出された。重機による表土層の除去に際して、確認面の一部に空洞が見られたことからその存在が明らかとなった。開口部の平面形態は円形を呈し、長径118cm、短径115cmを測る。豎坑部の断面形態は直立状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは140cmで、室部床面までの深さは215cmを測る。室部は西へ延びており、形態は隅丸方形を呈す。室部の規模は幅が300cm、奥行が310cmを測る。天井部は崩落しているが、壁から天井へかけての傾斜から、室部の高さは84cmと推測される。

出土した遺物には内耳土器・カワラケ・石鉢・織物石がある。

4号地下式横穴（第8図）

本址はJ-5・6グリッドで検出された。開口部が187号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。開口部の平面形態は円形を呈し、長径95cm、短径88cmを測る。豎坑部の断面形態は直立状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは140cmで、室部床面までの深さは227cmを測る。室部は北東へ延びており、形態は隅丸長方形を呈す。室部の規模は幅が298cm、奥行が224cmで、室部の高さは93cmを測る。豎坑部から室部に至る縁部には人頭大の砾が数個あり、室部が閉塞されていたと考えられる。

出土した遺物には内耳土器・カワラケ・石鉢がある。

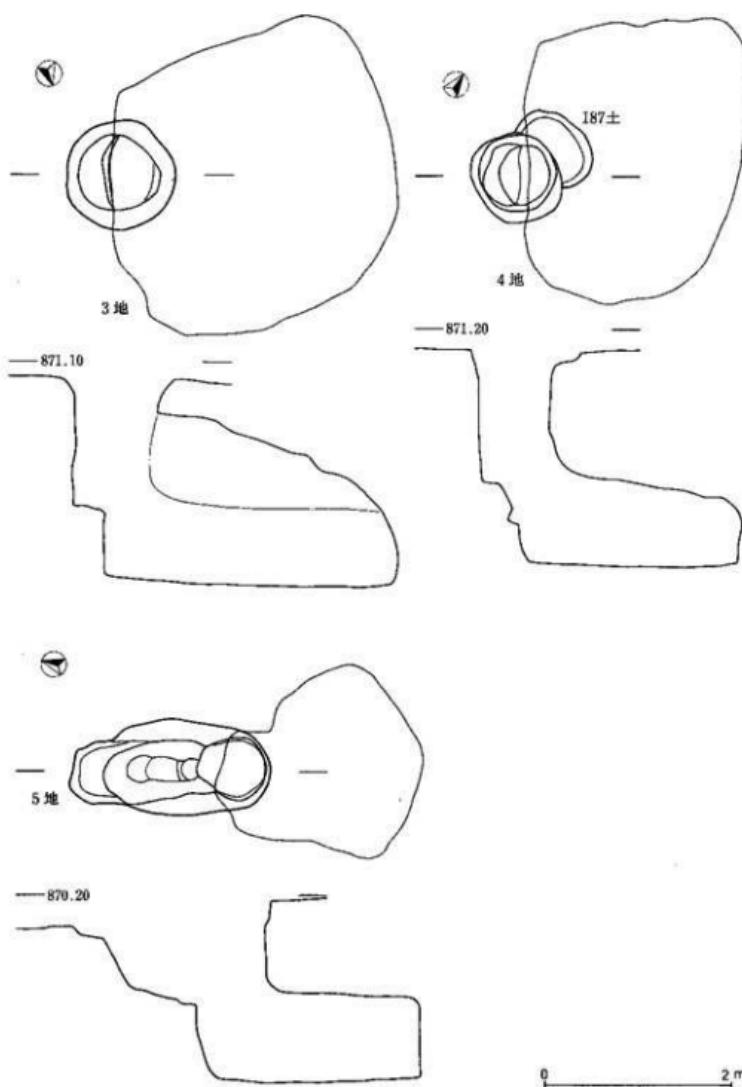
5号地下式横穴（第8図）

本址はH-5・6グリッドで検出された。開口部の北側が178号土坑と重複する。開口部の平面形態は円形の豎坑部の外側に階段状の施設が付属するため、長円形を呈し長径208cm、短径103cmを測る。豎坑部は南壁が直立状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは99cmで、室部床面までの深さは186cmを測る。室部は南東へ延びており、形態は不整形を呈す。室部の規模は幅が201cm、奥行が215cmで、室部の高さは96cmを測る。本址で特徴的なのは豎坑部全体が室部と同じ深さに掘られ、入口が階段状の掘り込みをもつて室部と連結していることである。他の地下式横穴と形態が異なることから、用途や造られた時期の違う可能性もある。

出土した遺物は、内耳土器と砥石が数点である。

6号地下式横穴（第9図）

本址はH-6グリッドで検出された。開口部の平面形態は円形を呈し、長径190cm、短径185cm



第8図 地下式横穴(2) (1/60)

を測る。豎坑部の断面形態はロート状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは210cmで、検出された地下式横穴のなかで最も深い。また室部床面までの深さは258cmを測る。室部は北へ延びており、形態は隅丸方形を呈す。室部の規模は幅が290cm、奥行が253cmで、室部の高さは105cmを測る。豎坑部直下の室部床面には、径50cmを超す大礫や人頭大の礫が10数個見られた。これらは豎坑部と室部の繋れる部分に、閉塞石として使われていたものと考えられる。覆土と共に室部に流れ込んだものであろう。

出土した遺物は、地下式横穴のなかで最も多く、内耳土器・カワラケ・錢貨・近世陶磁器がある。

7号地下式横穴（第9図）

本址はE-6グリッドで検出された。開口部の平面形態は円形を呈し、長径107cm、短径103cmを測る。豎坑部の断面形態は直立状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは126cmで、室部床面までの深さは214cmを測る。室部は東へ延びており、形態は整った長方形を呈す。室部の規模は幅が151cm、奥行が240cmで、室部の高さは90cmを測る。

本址から遺物は出土しなかった。

8号地下式横穴（第9図）

本址はE-7グリッドで検出された。開口部の平面形態は円形を呈し、長径96cm、短径87cmを測る。豎坑部の断面形態は直立状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは130cmで、室部床面までの深さは208cmを測る。室部は南へ延びており、形態は歪んだ長方形を呈す。室部の規模は幅が122cm、奥行が165cmで、室部の高さは88cmを測る。室部の天井と北壁には工具痕が顕著に見られた。

遺物の出土はなかった。

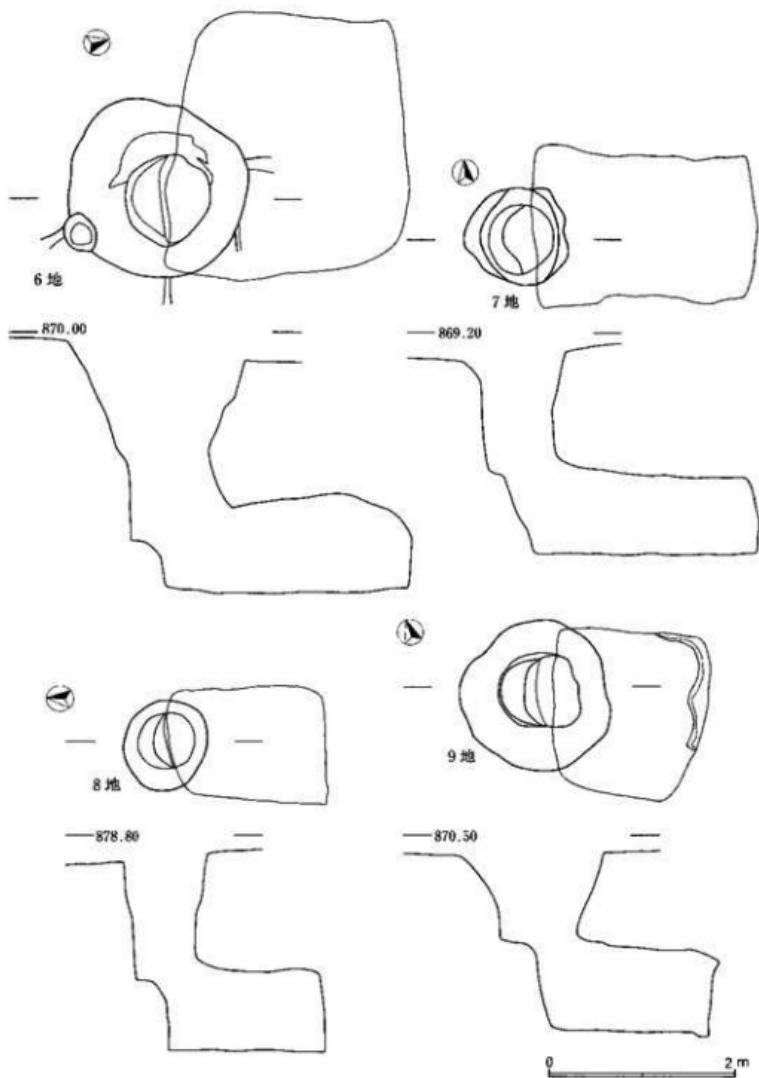
9号地下式横穴（第9図）

本址はF-2グリッドで検出された。開口部の平面形態は円形を呈し、長径161cm、短径160cmを測る。豎坑部の断面形態はロート状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは94cmで、室部床面までの深さは188cmを測る。室部は東へ延びており、形態は隅丸方形を呈す。室部の規模は幅が175cm、奥行が162cmで、室部の高さは90cmを測る。深さ5cmの周溝が、床面の奥壁と東壁の一部にかけて検出された。

出土した遺物には内耳土器・カワラケ・錢貨がある。いずれの遺物も土石と共に流れ込んだものと考えられる。

10号地下式横穴（第10図）

本址はB-2グリッドで検出された。開口部の平面形態は円形を呈し、長径154cm、短径133cmを測る。豎坑部の断面形態は直立状を呈す。確認面から足掛けまでの深さは172cmで、室部床面までの深さは200cmを測る。室部は南東へ延びしており、形態は稍円形を呈す。室部の規模は幅が161cm、奥行が108cmで、室部の高さは92cmを測る。足掛け部分には、室部と反対方向に高さが80cm、奥行が25cmの張り出しがある。奥行が狭いために掘り足したものであろうか。



第9図 地下式横穴(3) (1/60)

出土した遺物には当遺跡で唯一、復元により完形となった内耳土器が3点出土している。出土状況は、竪坑部の足掛けから室部に至る付近にまとまっていた。他に黒曜石片・人骨がある。人骨は内耳土器の出土した付近から出土している。いずれも覆土からの出土で遺構に伴うものとは考えられない。

11号地下式横穴（第10図）

本址はD-1グリッドで検出された。当初は円形の竪穴と考えられたが、調査の結果、天井部のほとんどが崩落した地下式横穴とわかった。開口部の平面形態は、現存する開口部の平面形状から、長径152cm、短径146cmを測る円形を呈していたと考えられる。また竪坑部の断面形態は、ロート状を呈していたと考えられる。確認面から足掛けまでの深さは107cmで、室部床面までの深さは221cmを測る。室部は北東へ延びており、形態は隅丸長方形を呈す。室部の規模は幅が254cm、奥行が205cmを測る。室部の高さは、壁から天井にかけての傾斜から172cmと推測される。壁面の南西隅にだけ工具痕が見られた。床面には、深さ4cmの周溝が竪坑部直下を除いて見られる。土層断面の観察では、床面と崩落した天井部のロームブックとの間に、土層断面間に表せないほど薄く黒色土が堆積していた。このような状況から、かなり早い時期に天井部が崩落したものと考えられる。崩落の原因は、他の地下式横穴の倍近い室部の高さを設けたためであろう。

出土した遺物には内耳土器・カワラケ・灰釉陶器碗・常滑系陶器・陽石がある。

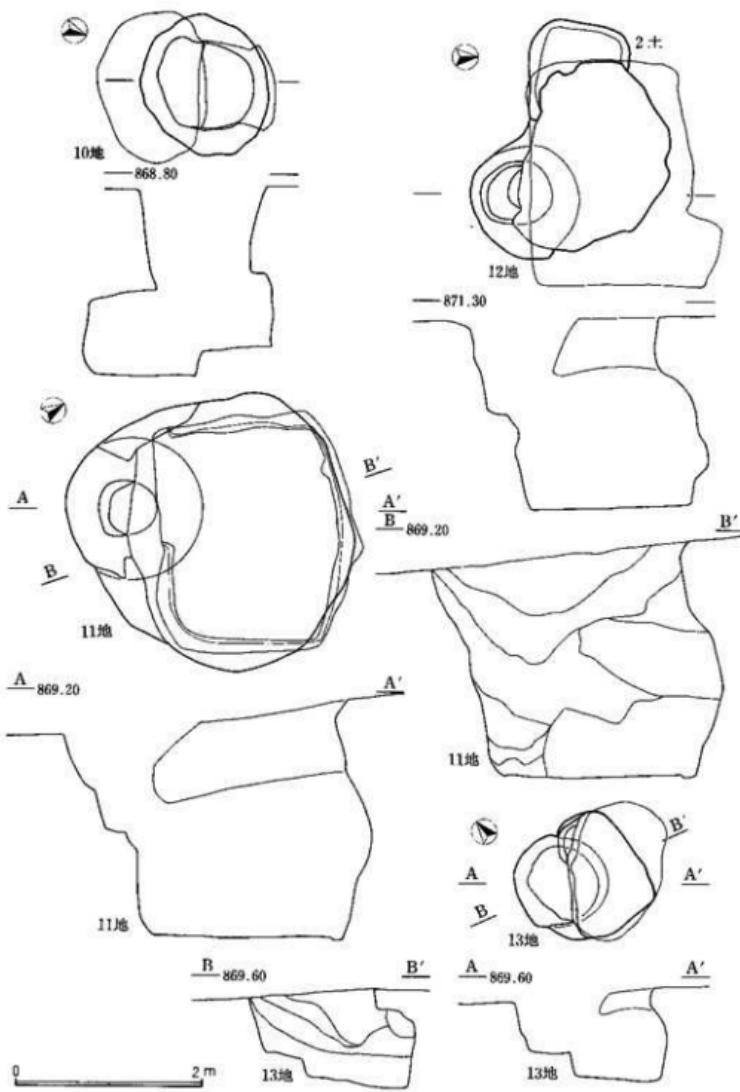
12号地下式横穴（第10図）

本址はI-2・3グリッドで検出された。天井部のほとんどは崩落していた。開口部の平面形態は、南側に現存する開口部の形状から、円形を呈し、長径122cm、短径112cmと推測される。また竪坑部の断面形態は、ロート状を呈していたと考えられる。確認面から足掛けまでの深さは102cmで、室部床面までの深さは205cmを測る。室部は北へ延びており、形態は長方形で、北壁東側に34cmほど張り出しが見られる。室部の規模は幅が240cm、奥行が172cmを測る。室部の高さは、壁から天井にかけての傾斜から、152cmと推測される。天井部の崩落は、室部の天井を高くしたため、逆に地表から天井までの厚さを薄くし、崩落を招いたと考えられる。崩落の時期は、覆土が11号地下式横穴と同じ状態で堆積していたことから、早い時期の崩落と考えられる。天井部が崩落しなかった開口部の西側には、2号土坑が掘り込まれている。

出土した遺物には内耳土器・土製円盤・砥石・鉄鎌・銭貨・打製石斧がある。

13号地下式横穴（第10図）

本址はF-6グリッドで検出された。天井部が崩落していたことと、他の地下式横穴に比べて小規模であったことから、掘り下げ時には土坑と考えていた。しかし足掛け状の張出しがあり、他の土坑と形態が異なることから小規模な地下式横穴と考えた方がよいと思われる。開口部の平面形態は、現存する開口部の形状から、長径99cm、短径97cmの円形を呈していたと考えられる。また、竪坑部の断面形態は、直立状を呈していたと考えられる。確認面から足掛けまでの深さは58cmで、室部床面までの深さは87cmを測る。室部は南東へ延びており、形態は不整形を呈す。室



第10図 地下式横穴(4) (1/60)

部の規模は幅が149cm、奥行が90cmで、室部の高さは、壁の傾斜から73cmと推測される。

本址からの遺物の出土はなかった。

(3) 土間状遺構（第11図）

本遺跡の南斜面で、土間状遺構が3基検出された。1・3号土間状遺構は重複し、2号土間状遺構は2号方形窓穴に隣接する。3基の土間状遺構からは遺物の出土が少ない。

1号土間状遺構

本址は、重機による表土剥ぎの際に、土間の一部が検出され、存在が明らかとなった。平面形態は不整形で、南北395cm、東西340cmを測る。本址の北西隅には焼土が見られた。単独で焼土を伴う遺構が本遺跡において他に見られないことから、土間状遺構に伴うものと考えている。

遺構からは、内耳土器片が1点出土している。

2号土間状遺構

本址は、2号方形窓穴の北側に位置し、南東隅で切られている。長方形の落ち込みが見られ、掘り下げたところ、約15cmで土間が検出された。床面の所々が堅く踏み締められている程度である。更に土間状遺構と2号方形窓穴の間には、土間状遺構より小規模な長方形を呈す掘り込みが検出された。平面形態は東西に長い長方形を呈し、長軸270cm、短軸205cmを測る。床面は土間状遺構よりも一段低くなっている。床面は堅緻でないが、本址に伴う何等かの施設であると考えられる。更にこの長方形の掘り込みの周辺には、土間状遺構とほぼ同じ深さで、床面が堅緻でない部分があるが、切り合いもないことから、同時に存在していたと思われる。本土間状遺構とこの周辺部を合せた、方形を呈する遺構の規模は、南北470cm、東西455cmを測る。なお、本址の北辺と南辺の中央やや西寄りに土坑状の掘り込みが見られる。北側の掘り込みの平面形態は隅丸方形で、長軸85cm、短軸71cm、深さ32cmを測る。南側の掘り込みの平面形態は楕円形で、長軸125cm、短軸103cm、深さ34cmを測る。この南側の掘り込みの覆土には焼土塊が含まれる。この3基の掘り込みはいずれも本址に伴うと考えられる。

本址からは近世陶磁器片が1点出土している。

3号土間状遺構

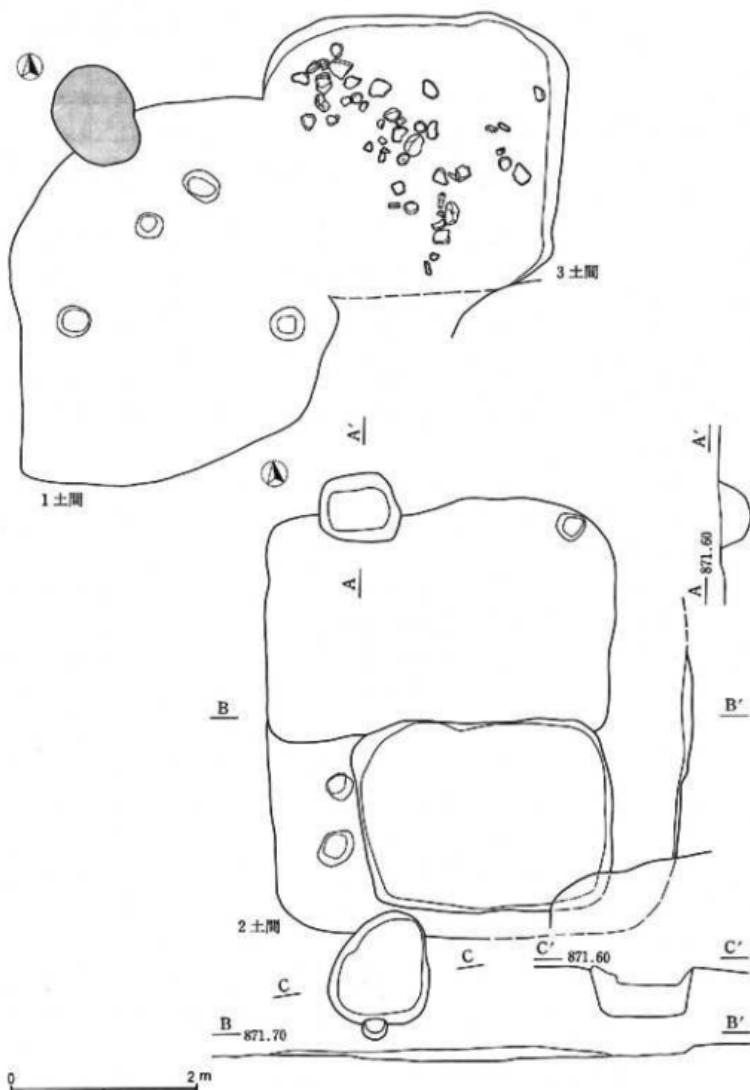
本址は、1号土間状遺構と重複するが、切り合いがはっきりせず新旧関係を明らかにすることは出来ない。平面形態は東西にやや長い隅丸方形で、南北300cm、東西320cmを測る。壁の立ち上がりははっきりせず、皿状に凹んでいる。堅く踏み締められた床面からは、多数の礫に混じって内耳土器片と石鉢が出土した。これらは床面直上、または床上数cmにあることから遺構に伴うものと考えている。

（小池）

(4) 土坑（第12～27図）

本遺跡からは190基の土坑が検出された。

本遺跡で検出された土坑は、台地の北斜面に分布の中心があるようで、台地の中央部から南斜面にかけては散発的に分布している。北斜面の土坑は、大きく3の群にまとまるが、それぞれの



第11図 土間状遺構 (1/60)

群で重複が激しく、各群に時代あるいは時期差があると考えるよりも、各群毎にかなり長い年月にわたって、何回も掘り下げと埋め戻し（あるいは埋没）が繰り返されていると考える方がよいように見受けられる。

土坑は様々な形態や規模を持つが、幾つかに分類が可能である。平面形態はその形状により、円形、方形、長方形、隅丸方形、隅丸長方形、楕円形、長円形の7に分類が可能である。方形と長方形、あるいは隅丸方形と隅丸長方形との分類の基準は、長短の差が10cm未満であれば方形または隅丸方形とした。

断面形態はその形状により、皿形、クライ形、バケツ形、桶形の4に分類が可能である。断面の形態は短軸によったが、その基準を示すと、平面の短軸の長さが深さに比して3.5:1を上回るものを皿形とし、2:1から3.5:1の間にあるものをバケツ形、2:1未満のものを桶形とした。

円形の土坑は、21基検出されている。平面長軸は79~210cmで平均132cm、平面短軸は72~203cmで平均125cm、底面長軸は46~158cmで平均109cm、底面短軸は44~146cmで平均104cm、深さは5~71cmで平均29cmを測る。

方形の土坑は、3基検出されている。平面長軸は124~208cmで平均157cm、平面短軸は118~203cmで平均148cm、底面長軸は116~194cmで平均145cm、底面短軸は108~190cmで平均137cm、深さは10~13cmで平均11cmを測る。

長方形の土坑は、100号土坑の1基が検出されているだけである。平面長軸は95cm、平面短軸は57cm、底面長軸は81cm、底面短軸は47cm、深さは32cmを測る。

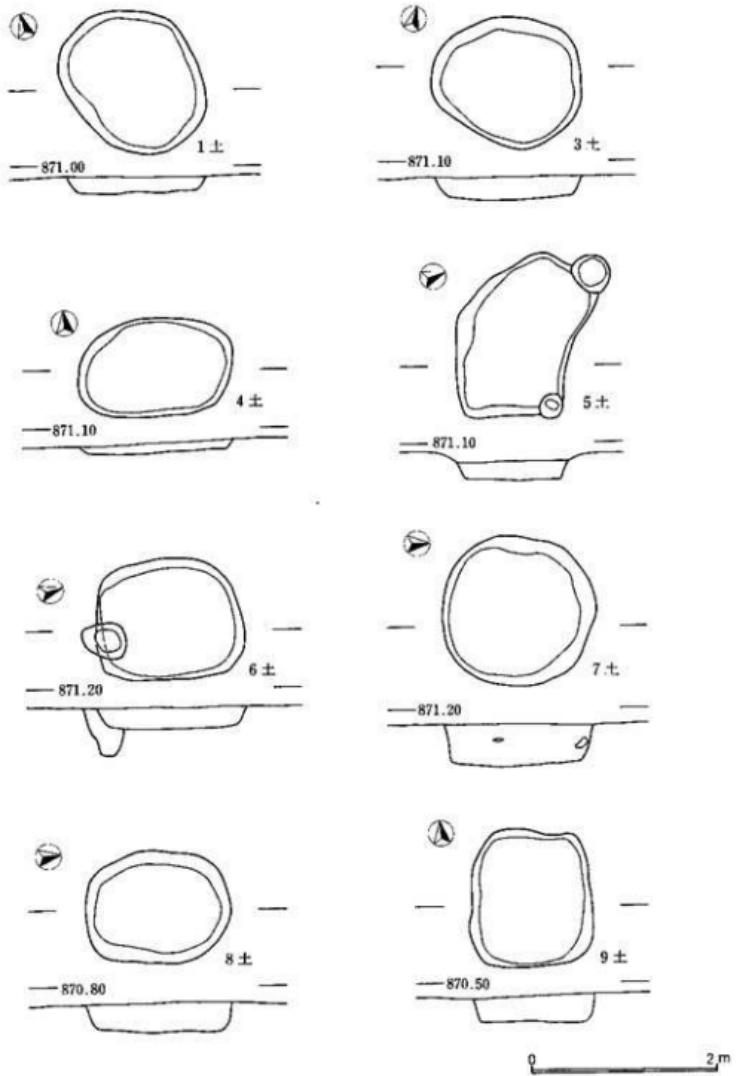
隅丸方形の土坑は、34基検出されている。平面長軸は77~191cmで平均136cm、平面短軸は67~173cmで平均127cm、底面長軸は65~165cmで平均120cm、底面短軸は56~161cmで平均108cm、深さは8~45cmで平均24cmを測る。

隅丸長方形の土坑は、74基検出されている。平面長軸は85~345cmで平均172cm、平面短軸は37~197cmで平均128cm、底面長軸は76~328cmで平均153cm、底面短軸は27~177cmで平均110cm、深さは3~78cmで平均23cmを測る。

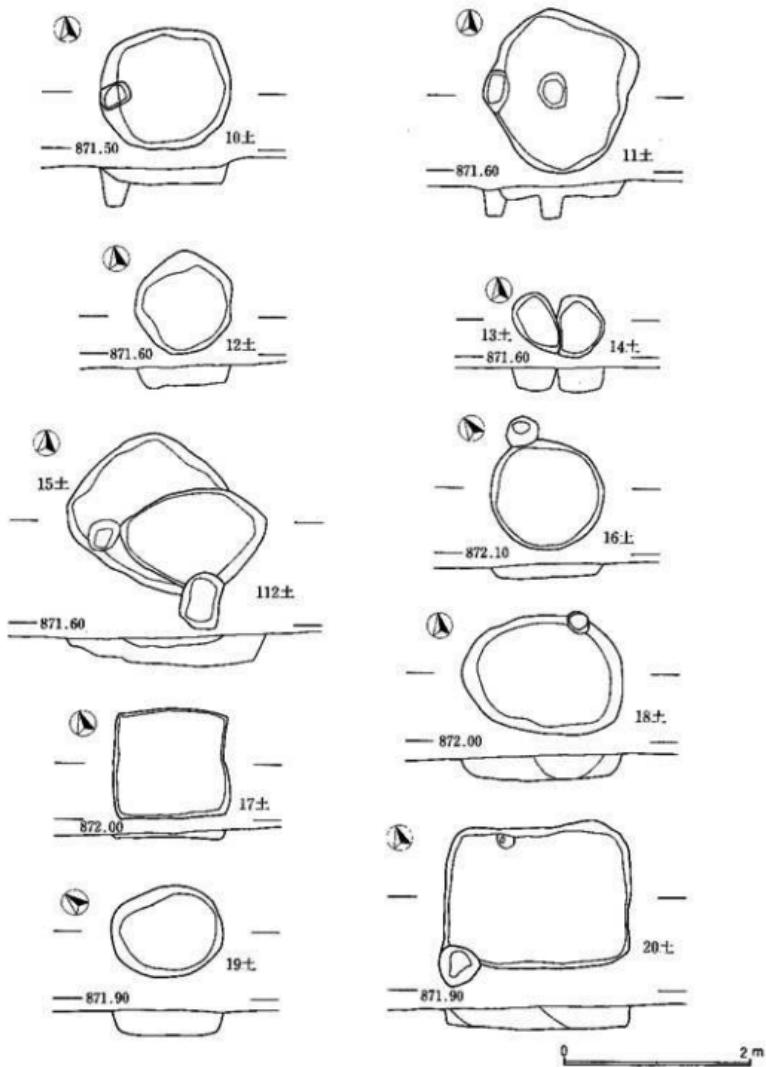
楕円形の土坑は、23基検出されている。平面長軸は67~221cmで平均151cm、平面短軸は42~174cmで平均118cm、底面長軸は55~196cmで平均132cm、底面短軸は33~145cmで平均101cm、深さは5~45cmで平均25cmを測る。

長円形の土坑は、4基検出されている。平面長軸は143~210cmで平均171cm、平面短軸は75~131cmで平均106cm、底面長軸は134~180cmで平均153cm、底面短軸は57~113cmで平均93cm、深さは7~25cmで平均14cmを測る。

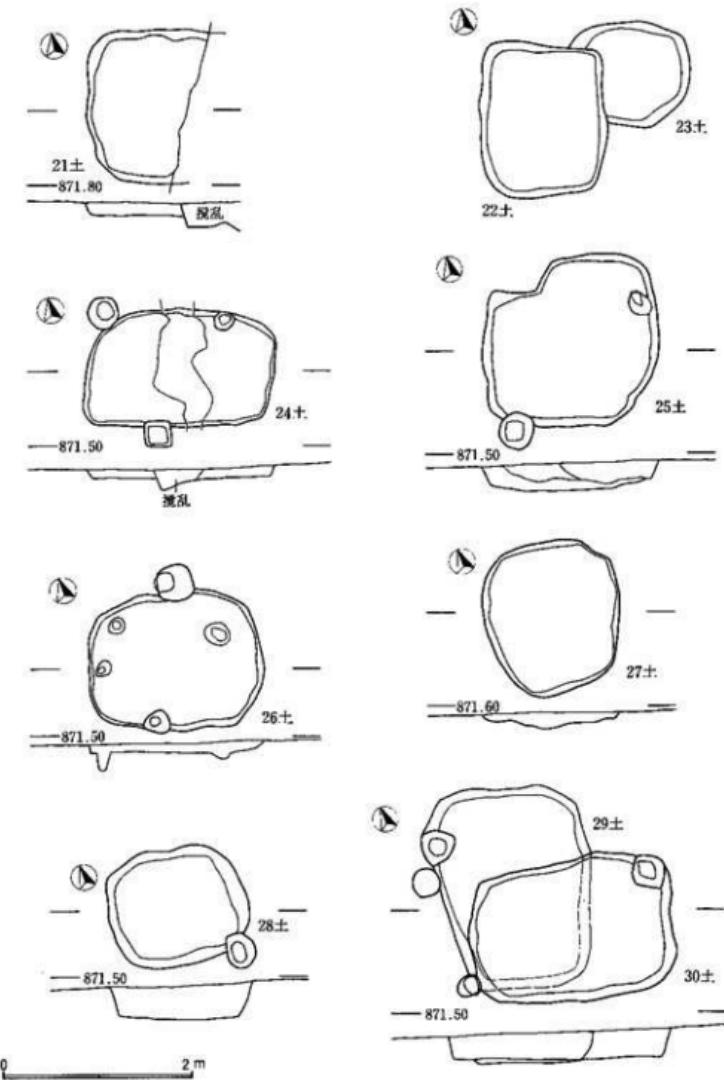
この他に不整形の土坑が12基、不明の土坑が17基あるが、不整形のものの中には更に幾つかの土坑が重複している可能性のあるものもある。不明のものについては、他の遺構との重複により、全体の形態を明らかに出来ないものをまとめた。



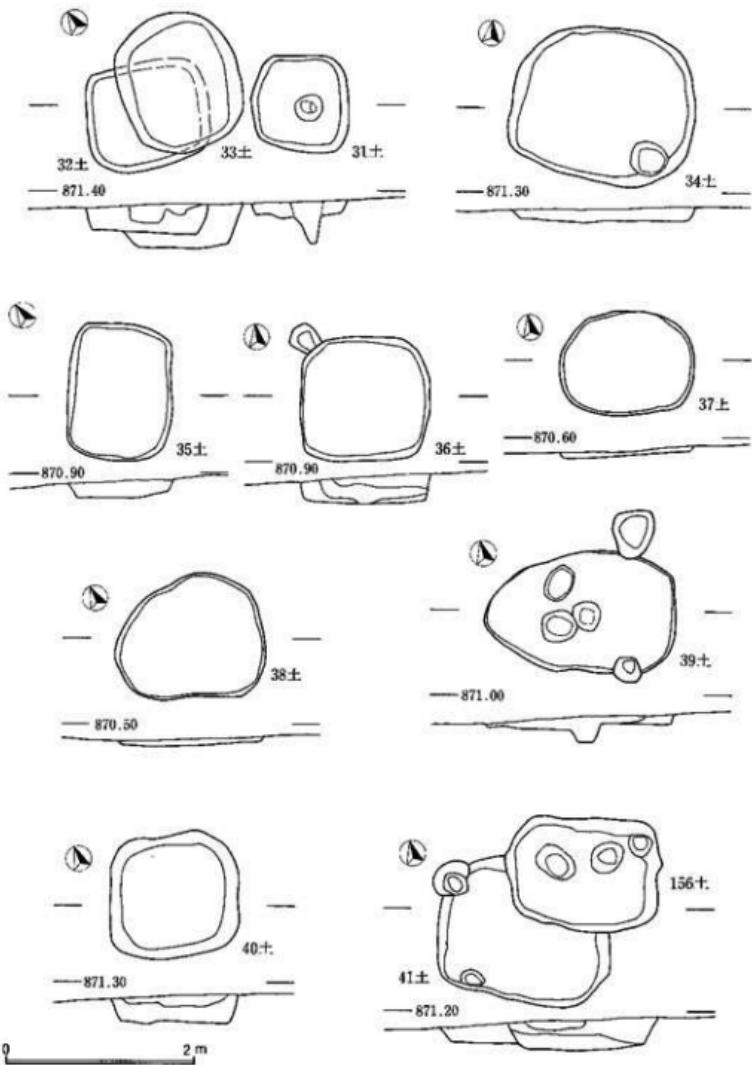
第12図 土 坑(1) (1/60)



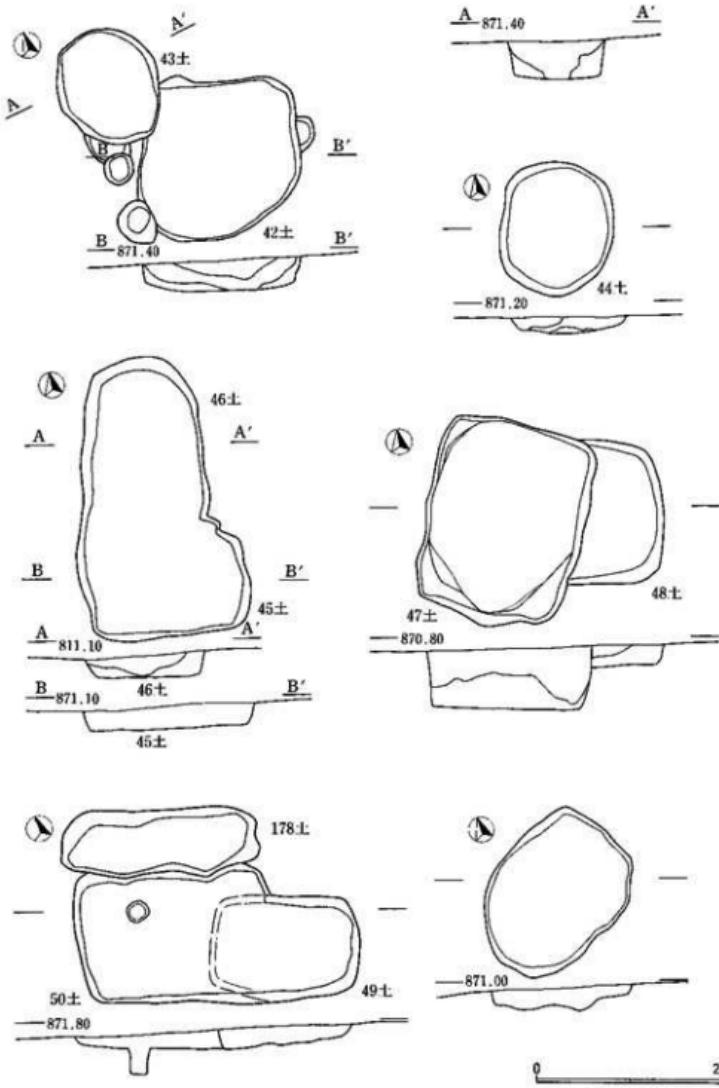
第13圖 土 級(2) (1/60)



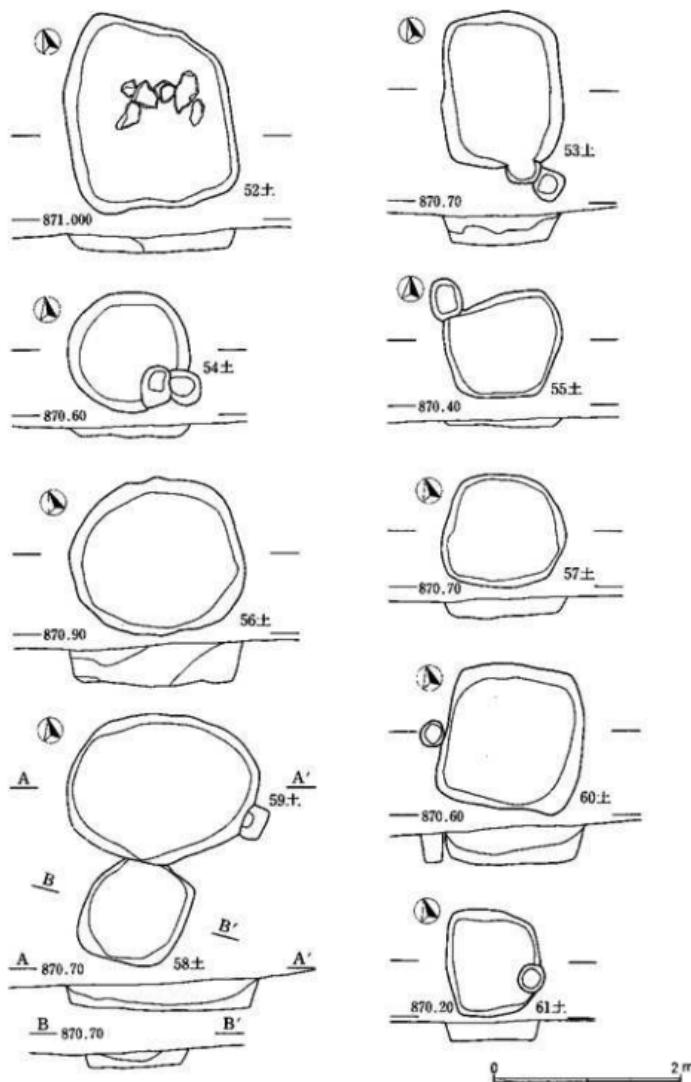
第14図 土 坑(3) (1/60)



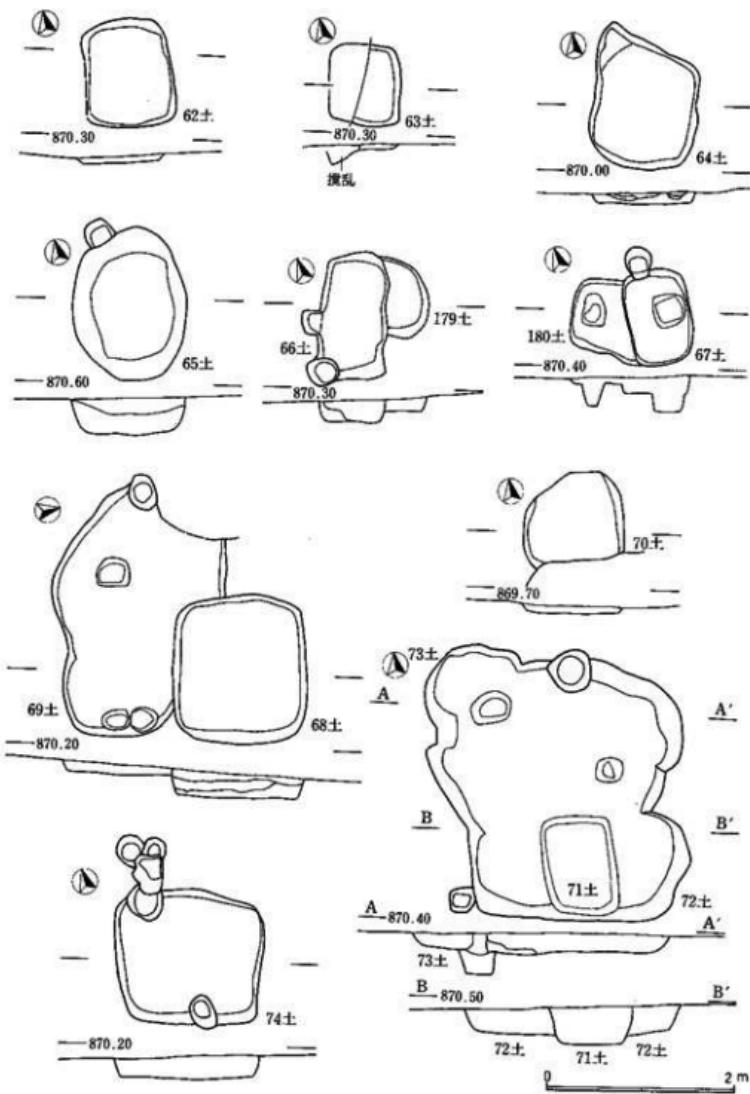
第15図 土坑(4) (1/60)



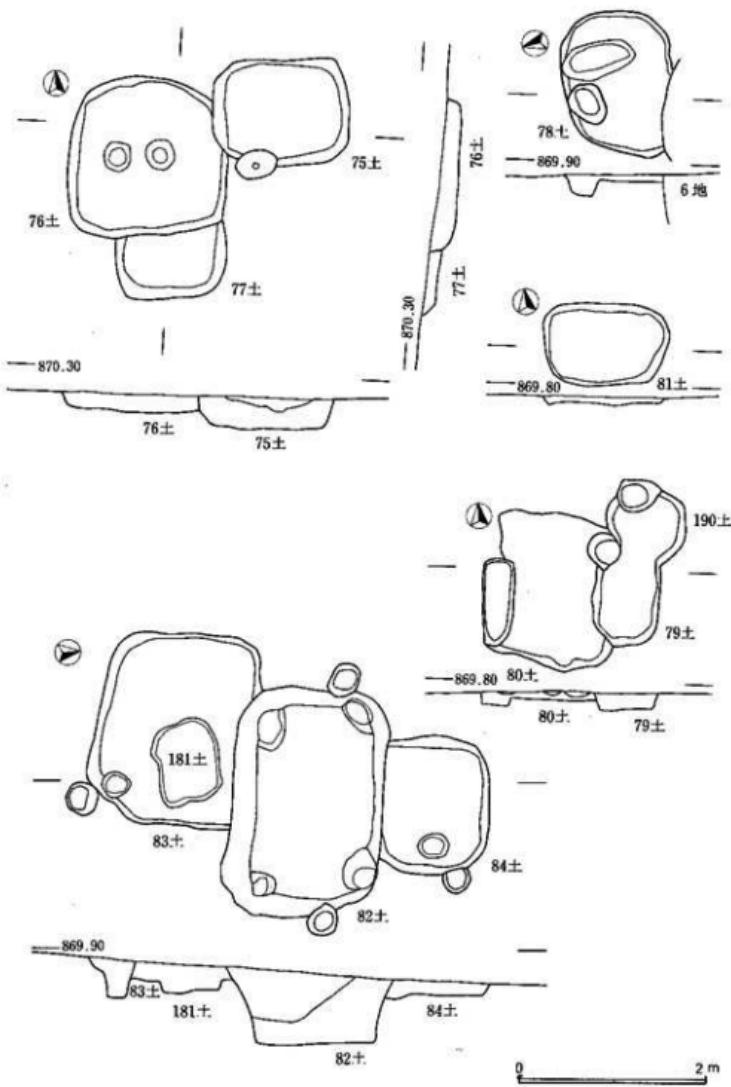
第16図 土 窑(5) (1/60)



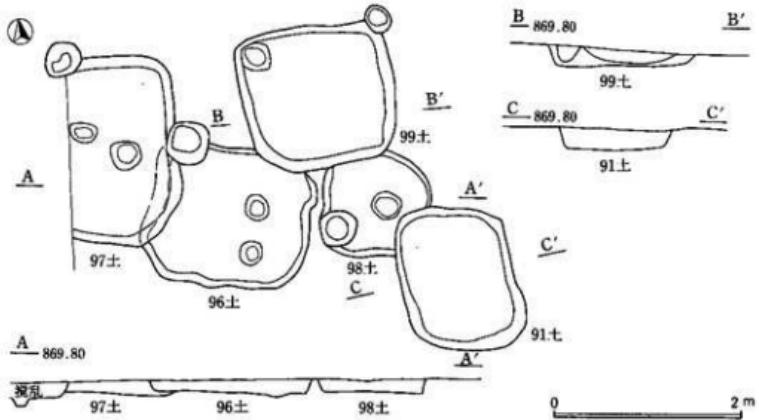
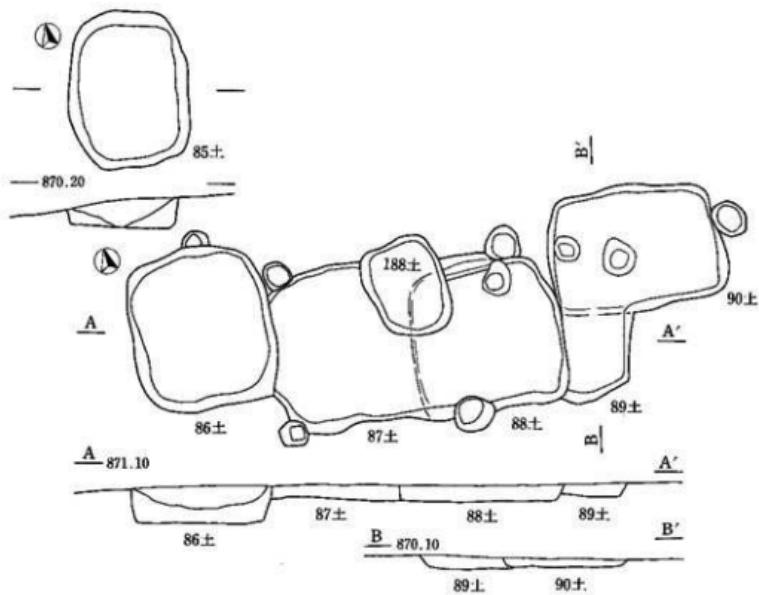
第17図 土坑(6) (1/60)



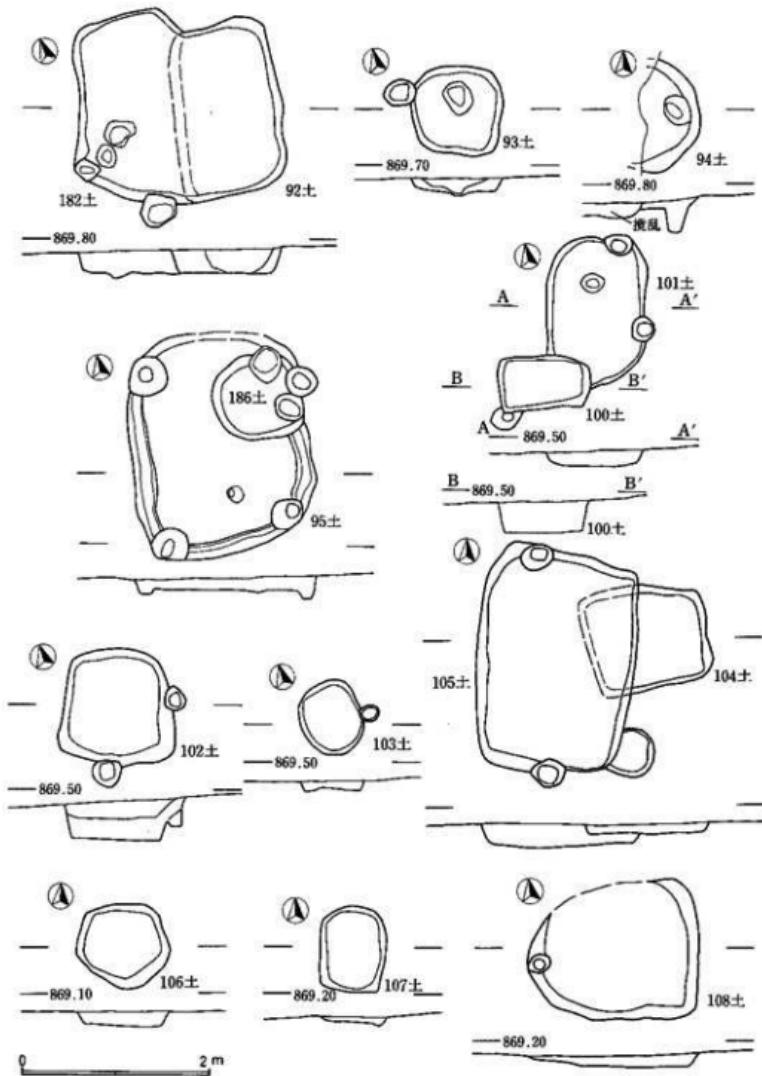
第18図 土 坑(7) (1/60)



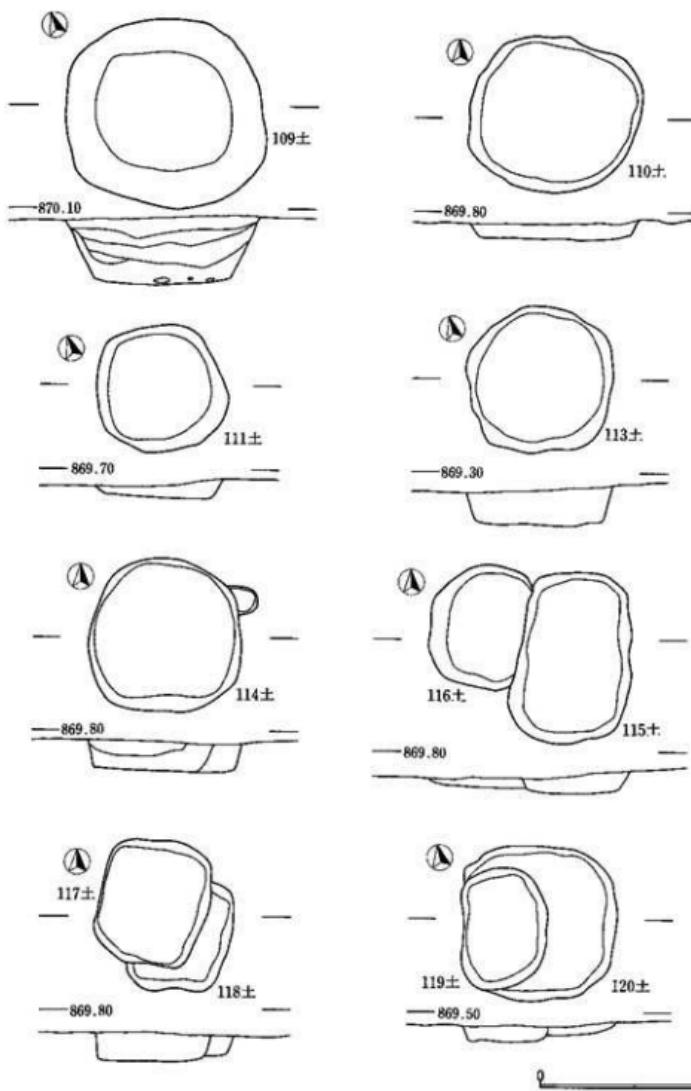
第19図 土坑(8) (1/60)



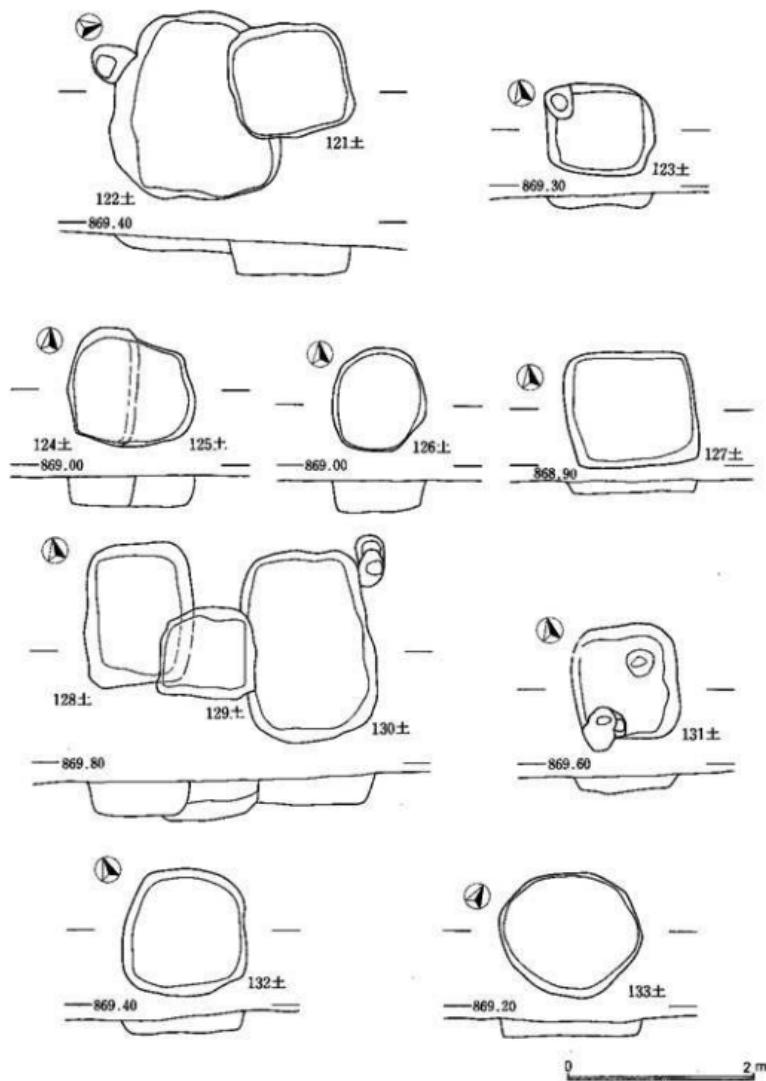
第20図 土 坑(9) (1/60)



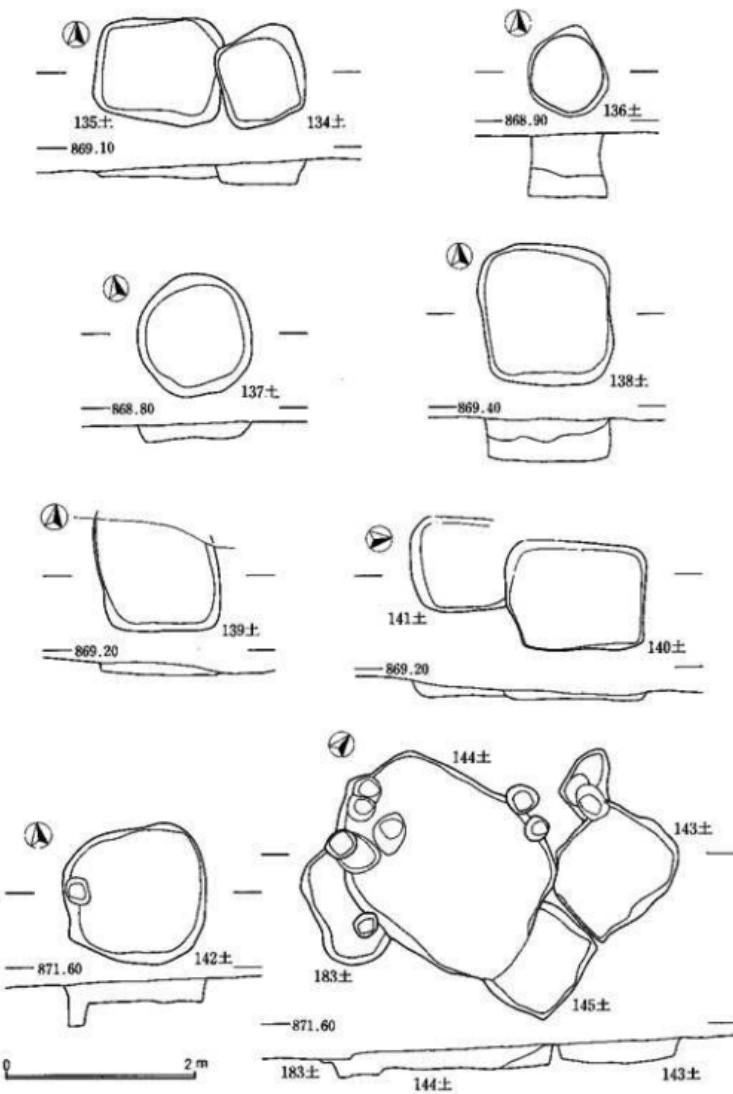
第21図 土坑⑩ (1/60)



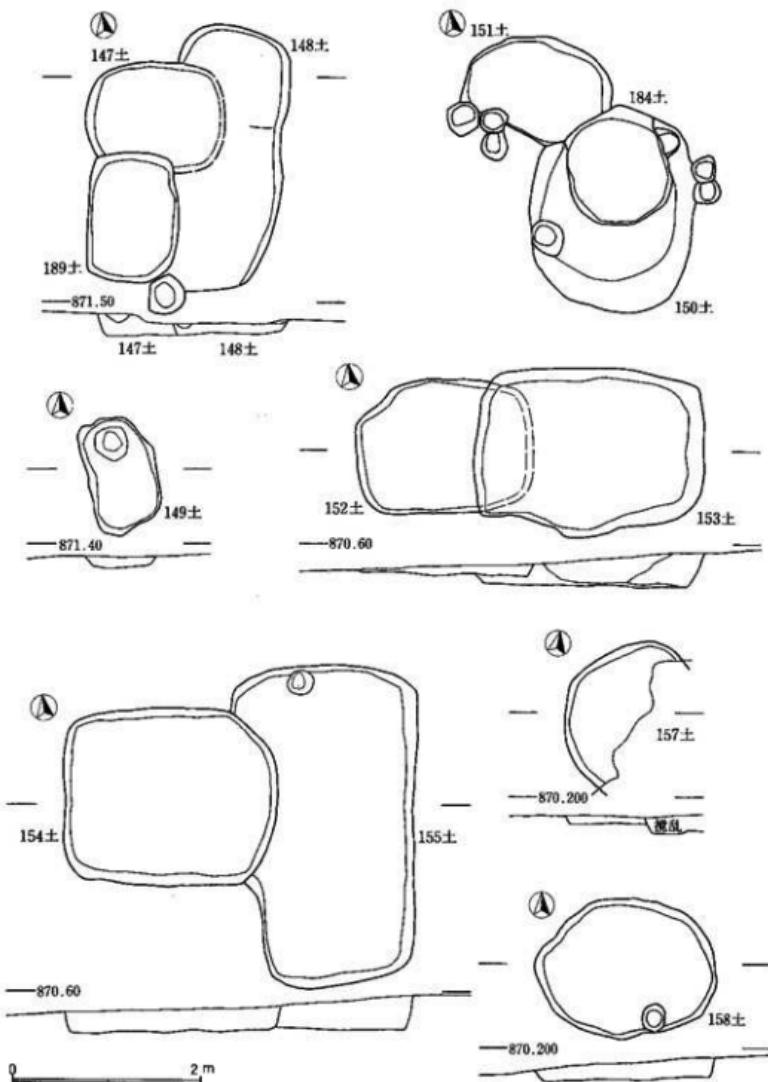
第22図 土 坑(1/60)



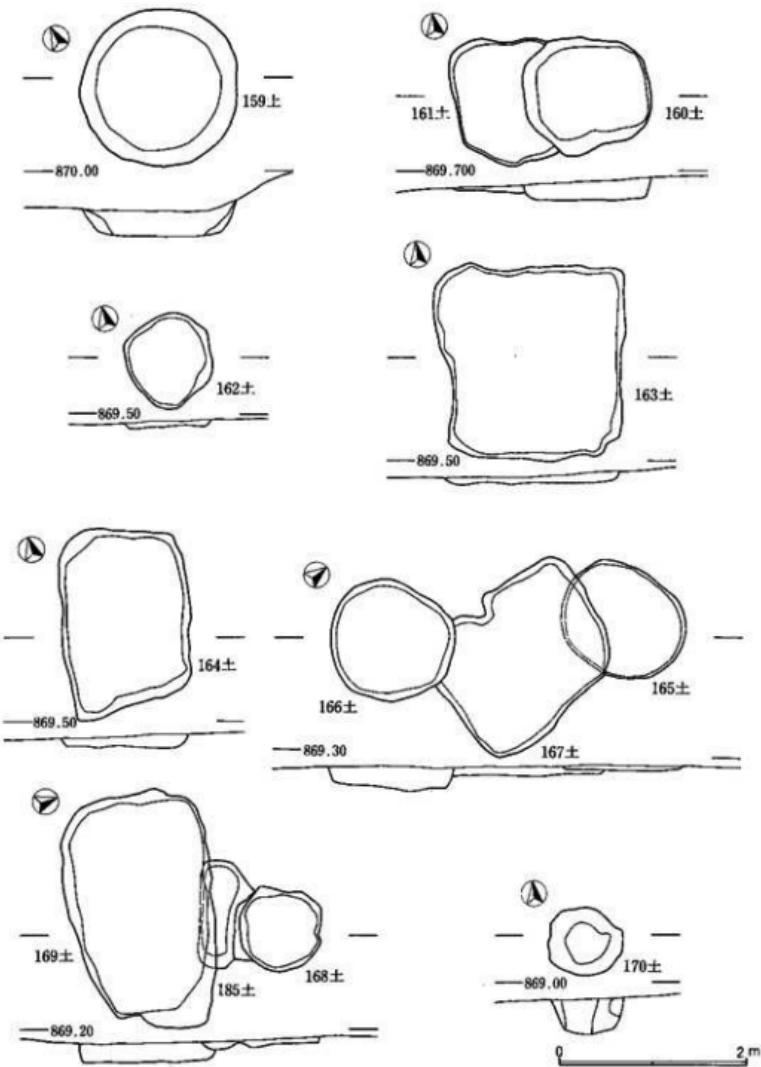
第23図 土 坑(1/60)



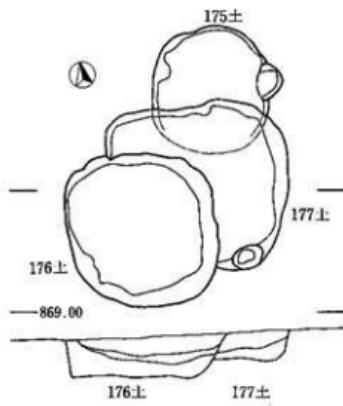
第24図 土 坑03 (1/60)



第25図 土 坑10 (1/60)



第26図 土 坑(1/60)



0 2 m

第27圖 土 坑(1/60)

土坑からは内耳土器310点、カワラケ32点、青磁2点、天目2点、黄瀬戸1点、石臼4点、石鉢2点、砥石4点、編物石1点、刀子4点、刀装具4点、錢貨1点、縄文土器3点、打製石斧2点、黒曜石片4点、近世陶磁器17点と、様々な遺物が出土している。

土坑にはピットを有するものがかなりの数見受けられるが、確実に土坑に伴うと考えられるのは、82・95号土坑の2基だけで、他の土坑に見られるピットについては、土坑外に多く存在するピットと共に、建物址を構成すると考えた方がよいと思われる。 (小林)

(5) ピット

本遺跡では、調査区の広範にわたり多数のピットが検出された。遺跡内の分布は、南斜面のピットは散発的に分布するのに対し、北斜面のピットは土坑のまとまりのある場所に、ピットも集中するようである。ピットの総数は821個を数える。規模は直径15~50cmまで見られるが、30cm程度が主体をなしている。深さは検出状況によって様々であるが、10~85cmを測る。

821個検出されたピットの内、遺物の出土したピットは22個ある。出土遺物には、内耳土器・カワラケ・青磁・陶器皿・砥石・縄文土器がある。 (小池)

2 遺 物

本遺跡から出土している遺物には、青磁、白磁、天目、黄瀬戸などの陶磁器、捏鉢、内耳土器、カワラケなどの土師質土器、石臼、石鉢、陽石、砥石、丸石、石製円盤、編物石などの石製品、鉄鎌、刀子、釘などの鉄製品、銅製刀装具、錢貨などがある。

(I) 陶磁器

陶磁器には青磁、白磁、天目、黄瀬戸がある。

青磁 (第28図3~5)

青磁は11点が出土しているが、すべて小片である。青磁の出土している遺構は3・5号方形竪穴、1・39・45・56・78・113・114号土坑、ピット12の9遺構で、3号方形竪穴からは2片が出土し、接合している。その他の遺構からは各1片ずつの出土である。図示した3点は3が3号方形竪穴、4が114号土坑、5が56号土坑出土である。図示出来なかったものも含め、色調は淡緑青灰色で、業地は白灰色で緻密、焼成は堅緻で、すべて龍泉窯系であると考えられる。

白磁

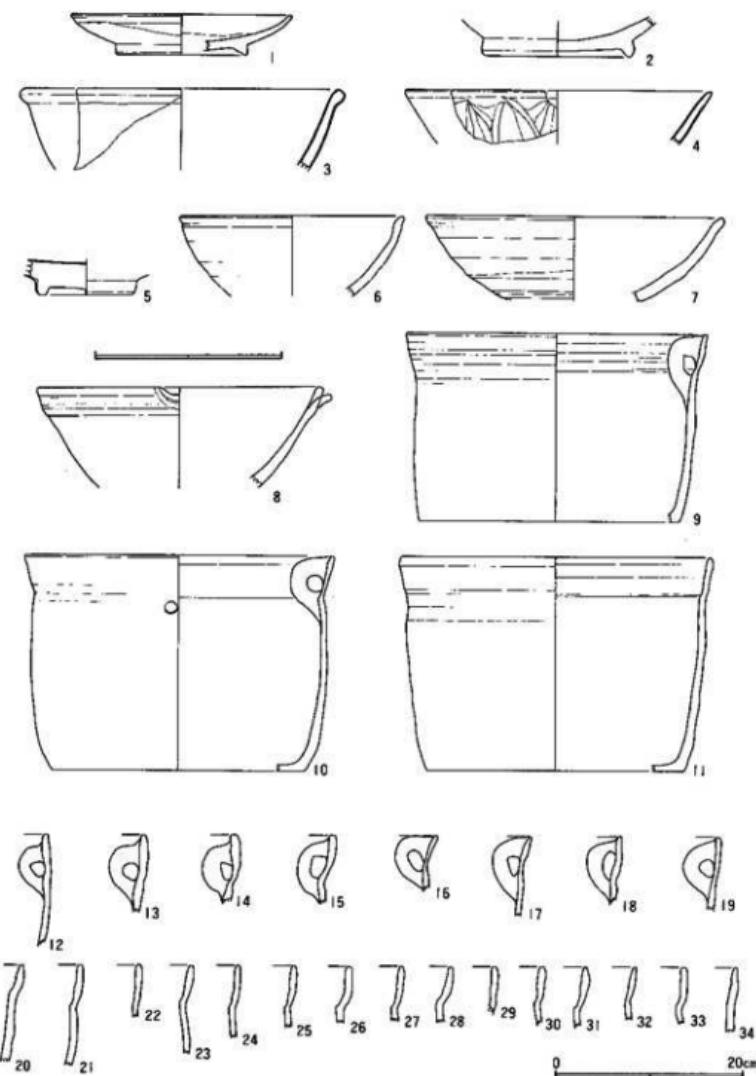
図示は出来なかったが、1点が91号土坑から出土している。

天目 (第28図6)

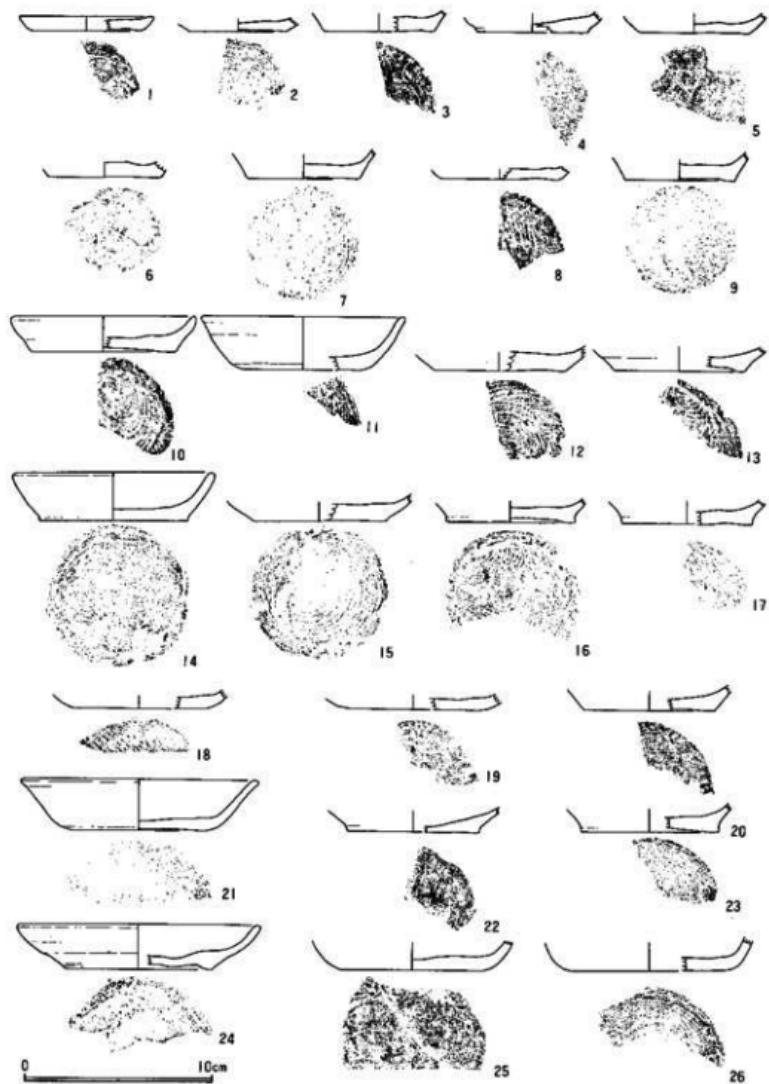
天目は82号土坑、138号土坑から各1点の2点が出土している。図示したものは82号土坑出土のものである。2点は接合はしないものの、同一個体ではないかと考えられる。底部を欠く。法量は口径11.8cmを測る。

黄瀬戸 (第28図7)

黄瀬戸は1点が82号土坑から出土している。底部を欠く。法量は口径15.1cmを測る。



第28図 陶磁器・内耳土器 (1~7は1/3, 8~34は1/6)



第29図 カワラケ (1/3)

(2) 土師質土器

土師質土器には捏鉢、内耳土器、カワラケがある。

捏鉢（第28図8）

2号地下式横穴からの出土である。土師質で、片口部を持つ。底部がなく、全体の形状は明らかでないが、口径30.2cmを測る。同じ地下式横穴からは同一個体と考えられる破片が出土しているが、接合はしない。

内耳土器（第28図9～34）

多くの遺構から出土している。出土点数は小片を含め、612点に及ぶが、図示出来たものは少ない。復元により完形となった内耳土器3点（9～11）は、いずれも10号地下式横穴からの出土であるが、竪坑部の足掛けから室部に入る付近にかたまって出土しており、室部がほぼ埋没した状態での投込みと考えられる。9は口径32cm、底径27.6cm、器高20.2cm、10は口径33cm、底径26.8cm、器高23cm、11は口径33cm、底径27.2cm、器高22.8cmを測る。

耳部の出土は、図示出来なかったものを含め、22点ある（12～19）。口縁部の形状についても可能な限り図示した（20～34）が、すべて口縁部と胴部の間に稜を持つものである。

カワラケ（第29図）

カワラケは68点が出土している。そのうち口縁部は14点、底部は46点ある。可能な限り図示したが、全体の形状が明かとなったものは少ない。1のような小型の板状カワラケから、大型品まで認められる。

(3) 石製品

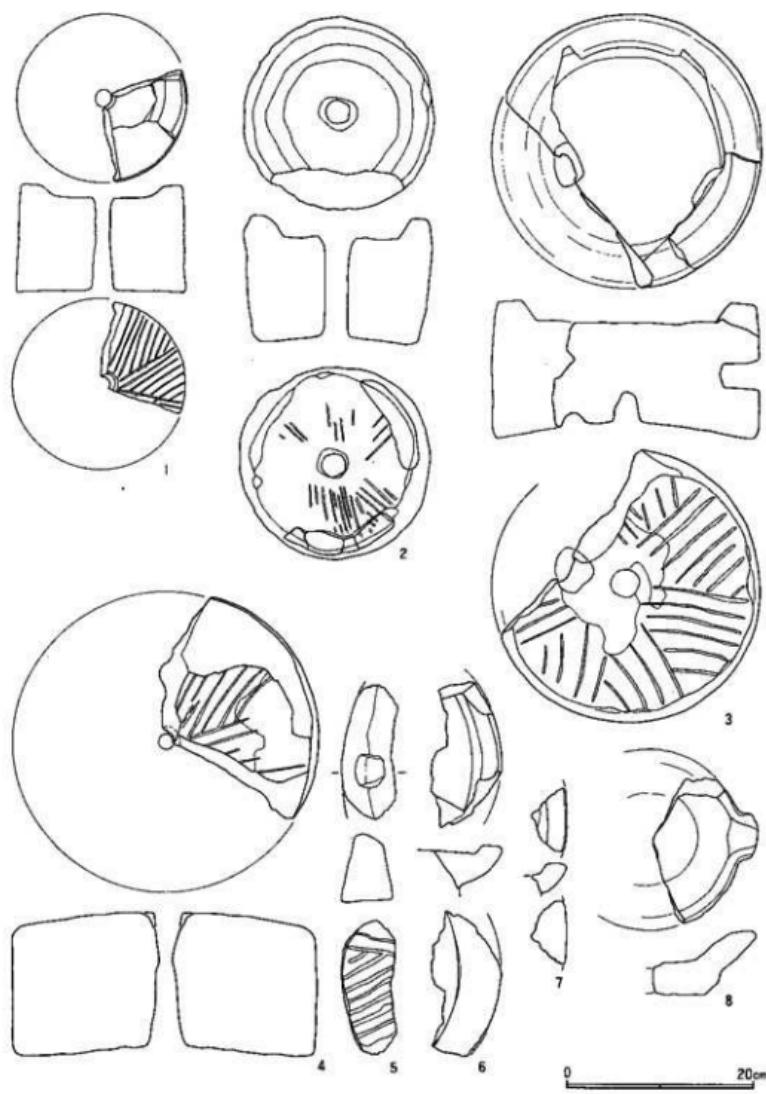
石臼（第30図）

すべて安山岩製である。1・2は共に茶臼の上臼であろう。1はピット22からの出土であるが、1/4の遺存率である。2は多孔質の軽い安山岩を材としており、上縁（口縁）が何ヶ所かで割れていた。かなりの残存率であるが、挽き手穴は見られない。146号土坑からの出土である。3は挽き臼の上臼である。1号地下式横穴からの出土であるが、上縁の一部が2号地下式横穴から出土し、接合した。挽き手穴と供給口を持つ。4は挽き臼の下臼で、ピット22からの出土である。5は挽き臼の上臼で、挽き手穴の箇所で割れている。表採。6～8は共に茶臼の受け皿部と考えられる。6が83号土坑、7が102号土坑、8が109号土坑からの出土である。

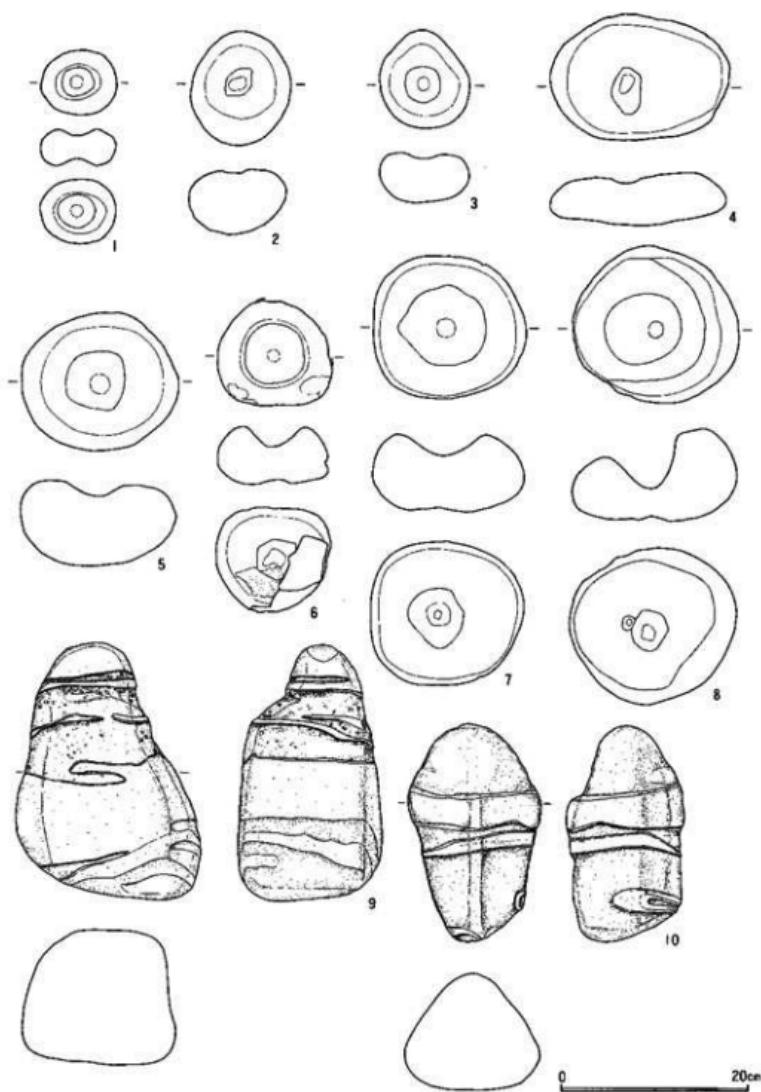
本遺跡出土の石臼は、完形での出土、上臼・下臼が揃っての出土ではなく、別々に出土していること、それぞれの遺構での出土状態などから見て石臼がその場で使用されたとは考えられない。

石鉢（第31図1～8）

繩文時代の凹石に形状が類似する。大きさは長さが8cmほどのものから、かなり大きく17～18cmを測るものまで様々である。また、凹部の形状も小さく浅いものから大きく深いものまで色々であり、用途も同じとは考えられない。表裏両面に凹みのあるものも見られる（6～8）。出土遺構については1が4号地下式横穴、2が3号土間状遺構、3・4が2号地下式横穴、5が109号土



第30図 石白 (1/6)



第31図 石鉢・陽石 (1/6)

坑、6が59号土坑、7が3号地下式横穴、8が2号方形豎穴からの出土である。

陽石（第31図9・10）

縄文時代の石棒に形状が類似する。

9は敲打により頭部を作りだしている。5号方形豎穴からの出土である。5号方形豎穴の覆土は2層に分層出来るが、本遺物は上層の下部から出土しており、造構がある程度埋没してから廃棄されたものと考えられる。10はよく研磨されている。11号地下式横穴からの出土である。11号地下式横穴は天井部が崩落しており、本遺物は天井部の崩落による埋没と考えられるロームのかなり混じる土層の上から出土しており、地下式横穴の天井崩落後、凹みに廃棄されたものと考えられる。

（小林）

砥石（第32図）

本遺跡からは16点出土している。1・6は5号方形豎穴、2・4は表採、3は153号土坑、5は102号土坑、7・16は3号方形豎穴、8・10・11は1号方形豎穴、9は12号地下式横穴、12はピット9、13は5号地下式横穴、14は7号土坑、15は130号土坑からの出土である。砥石は石材による分類と、その機能部である研ぎ面による分類が考えられる。石材による分類は、研ぐ作業の段階別によって荒砥・中砥・仕上砥に分けられ、石材に違いが見られる。一般に荒砥・中砥には安山岩・砂岩・凝灰岩など、仕上砥には粘板岩・泥岩などを用いる。本遺跡から出土した砥石は、安山岩・砂岩・凝灰岩などが9点、粘板岩・泥岩などが7点である。研ぎ面により分類すると、4面を研ぎ面とするものが5点、2面を研ぎ面とするものが6点、1面を研ぎ面とするものが5点である。1面を研ぎ面とする砥石の石材は、いずれも粘板岩・泥岩などである。複数の面を研ぎ面とする砥石の石材は、粒子の荒いものを用いている。以上から、4・7・8・10・12~16が荒砥・中砥で、1~3・5・6・9・11が仕上砥と考えられる。荒砥・中砥の断面形は直方体を基本とし、仕上砥は板状を呈するようである。研ぎ面には、研ぎ方向を示す細かな擦痕の認められるものが多く、9・11のように溝状に擦れているものもある。また14・15は、同じ研ぎ面に違う方向から研いでいると思われる面を持つ砥石である。研ぎ面以外の面は、自然面と平坦面を作り出す切断をする際に用いた工具の擦切痕が残る面がある。3・5は他に類を見ない特殊な砥石である。3は研ぎ面と他の3面の所々に鉄分が付着し、文字が刻まれている。5は研ぎ面以外の面に、スス状のタールが付着している。

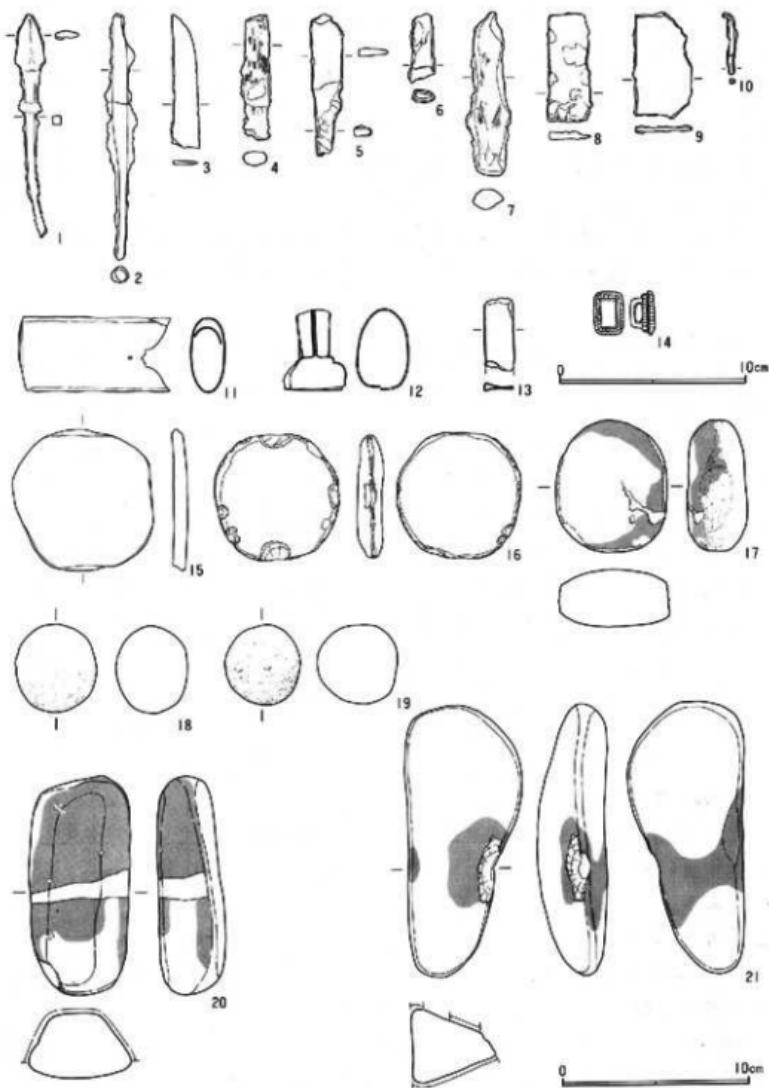
石材と形状から、ある程度の機能別分類は可能であるが、荒砥・中砥・仕上砥と明確に区分することが困難なものもあり、使用方法の限定されたものばかりではないだろう。

石製円盤（第33図16・17）

16は4号方形豎穴から出土している。扁平円碟の縁辺部に、所々敲打痕と剥離痕が見られる。17は96号土坑から出土している。やや厚みのある扁平円碟の縁辺部を、敲打痕が全周している。スス状のタールが片面の縁辺部と、敲打痕の一部に付着している。敲打痕のない部分は滑らかだが、人為的に磨かれたものかは分らない。



第32図 紙石 (1/3)



第33図 鉄・銅製品、土・石製品 (1/3)

丸石（第33図18・19）

用途不明の丸石が2点出土している。18は128号土坑、19は36号土坑からの出土である。共に全面が研磨整形されている。石材が違うために18は礫自体の凹凸が残り、19は光沢を持っている。19の一部には擦痕が見られる。

礫物石（第33図20・21）

本遺跡からは2点出土している。20は長楕円形礫、21は不整円形礫を用いている。20は113号土坑からの出土である。片面にスス状のタールが付着している。この面には、紐痕と思われるタールの付着しない部分が見られる。21は礫の片側縁辺部に、敲打による抉入部を作り出している。抉入部の周辺と、礫の側・裏面には、結ばれた紐による擦痕・抉痕と思われる痕跡が見られる。

（小池）

（4）鉄製品（第33図）

鉄製品には鉄鎌、刀子がある。

鉄鎌（第33図1・2）

1は12号地下式横穴からの出土であるが、室部の壁から天井部に移る高い位置で出土している。12号地下式横穴は天井部が崩落していたが、天井部が崩落し、室部がほぼ埋没し終わった段階で流れ込んだものと考えられる。全長12cmを測る。2は先端部を欠く。茎部断面が橢円形を呈する。

刀子（第33図3～9）

3が刀部先端で、身幅1.3cmを測る。5は刀部から茎部にかけてのもので、身幅2.7cmを測る。4・6・7は茎部で、木質部が付着している。8・9は身幅が広く、鎌の刀部になる可能性もある。

釘（第33図10）

頭部を折り曲げた「折れ釘」と呼ばれるものであるが、先端を欠くため全長は不明である。25号土坑からの出土である。

（5）銅製品（第33図11～14）

出土した銅製品は、いずれも刀装具と考えられるが、部首の明らかでないものも見受けられる。すべて82号土坑からの出土であり、セット関係にあるものと思われる。

（6）土製品

土製円盤（第33図15）

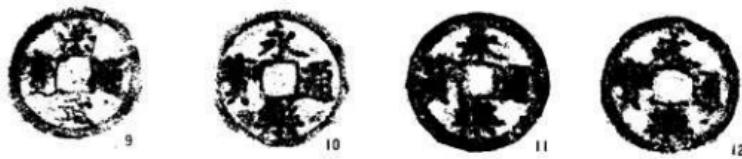
内耳土器の調部片から円形に作り出している。

（小林）

（7）錢貨（第34図）

本遺跡からは錢貨が出土している。すべて中国からの渡来錢であり、時期で言えば北宋・明時代のものである。本報告書には、保存状態が良好だった14点を図示した。

1は太平通寶である。本遺跡からは1点のみで、3号方形竪穴から出土している。北宋錢で、初鋤年は976年である。鋤造は良好だが、文字は摩耗し、腐食が著しい。書体は楷書体で、疏方は



第34図 錢 貨 (1/1)

対である。

2・8は皇宋通寶と考えられる。共に摩耗、腐食が著しく判読が難しい。2の一部は欠損している。2は3号方形豎穴から出土し、8は4号方形豎穴からの出土である。北宋錢で、初鑄年は1039年である。書体は2が楷書体で、8が篆書体である。読方は対である。書体と内郭の大きさ等が違うことから、鋳造の時期が異なると思われる。

3は治平元寶である。治平元寶は1点のみで、9号地下式横穴から出土している。北宋錢で、初鑄年は1064年である。鋳造は良好で、文字もしっかりしている。書体は楷書体で、読方は廻である。

4は熙寧元寶である。熙寧元寶は1点のみで、12号地下式横穴から出土している。北宋錢で、初鑄年は1068年である。鋳造は良好であるが、文字は摩耗している。書体は篆書体で、読方は廻である。

5・6・7は元祐通寶である。5は表採、6は3号方形豎穴、7は4号方形豎穴からの出土である。北宋錢で、初鑄年は1086年である。書体は5・6が行書体で、7は篆書体である。5・6の書体は同じだが、文字・直径・重さ・外輪幅等に違いが見られ、鋳造年が異なると考えられる。5・7の鋳造は良好であるが、6はもなく所々欠けている。5・7は摩耗のために文字が潰れ、また7は腐食も激しく判読を難しくしている。読方はいずれも廻である。

9は洪武通寶である。洪武通寶は1点のみで、2号方形豎穴から破損状態で出土している。明時代のもので、初鑄年は1368年である。鋳造は良好で、文字は容易に判読出来る。書体は楷書体で、読方は対である。

10・11・12は永樂通寶である。10は6号地下式横穴からの出土で、11・12は4号方形豎穴からの出土である。明錢で、初鑄年は1408年である。3枚共に鋳造は良好であるが、11・12は腐食が著しい。そのため11は文字が不鮮明となっている。10は表裏共にやや磨耗しているが、文字の判読は容易である。書体は楷書体で、読方は対である。3枚とも文字や外輪幅等に若干の違いが見られることから、鋳造された時期が異なると思われる。

13は二文字欠いているが、現存する文字から嘉祐通寶・嘉泰通寶・嘉定通寶・嘉熙通寶のいずれかと考えられる。これは3号方形豎穴からの出土である。書体は楷書体で、読方は対である。

14も欠損のため1文字しか現存していない。文字の形状から大觀通寶と思われる。4号方形豎穴からの出土である。

(小池)

第4節 近世以降

近世以降の遺物の出土した遺構には1号方形豎穴、1・2・6号地下式横穴、2号土間状遺構、9・36・61・62・83・94・97・105・109・130・147・157号土坑、柱穴列がある。遺物の多くは近世に属するものと思われるが、近・現代のものも混入していよう。また、明らかに近代から現代にかけてと考えられる遺構に9号土坑があり、ガラス片が出土している。

今回の発掘調査で検出された遺構の内、明らかに新しい時期の遺構と考えられるのは、この他には以下に述べる遺構だけである。

柱穴列は遺構検出時には掘立柱建物址になると考へたが、遺構内からガラス片やセルロイド片が出上し、新しい時期のものと考えられる。しかし、当地の地主さんらに話を聞いても植木の苗を植えた話も、ビニールハウスを建てた話もなく、この柱穴列に該当するような上物は無かったとの事である。

109号土坑はからは茶臼の下臼の受け皿部や石鉢も出上している。これと共にガラス製品の出土もあり、かなり新しいと考えられた。この穴について地主の方から蚕の糞を埋めた穴との話を聞いた。これと同様の形態をした土坑に159号土坑がある。どちらも現在の畑の境界の隅にあることから、同じ様な用途に用いたものと考えられる。

中世の遺構と近世以降の遺構については判断が難しい。地下式横穴の覆土内からも近世の陶磁器の出土があったが、天井部が崩落した際にゴミなどと一緒に投込まれたと考えられる。近世陶磁器を出土したもの全てを近世以降にすることは出来ない。各遺構からの遺物の出土状況をすべて把握しているわけではないが、地下式横穴以外にも凹みなどに投込まれたものもあったであろう。調査の方法を含めて今後の課題としたい。

(小林)

第IV章 まとめ

方形堅穴について

本遺跡からは5基の方形堅穴が検出されている。調査当初は1号方形堅穴のような規模で、柱穴と周溝を持つものを方形堅穴とした。その後、2号方形堅穴の様に、周溝や柱穴がなくともある程度の規模があるものについては方形堅穴とした。調査が進むにつれて、規模が小さいため土坑としたもののなかにも柱穴の存在するものや、周溝の認められるものもあり、方形堅穴と呼んでもよい遺構の存在することが分ってきた。また2号方形堅穴の平面は一辺が3m余りであるのに対し、最も小さい5号方形堅穴は平面の短軸が1m余りと、規模にかなりの違いがある。土坑とした47・82・95号土坑は5号方形堅穴と似た規模で、82・95号土坑の床面の四隅には柱穴が見られる。更に82号土坑では天目茶碗片や刀装具、銭貨が出土しており、3・4・5号方形堅穴の遺物出土状況に類似している。以上から、現在では47・82・95号土坑も方形堅穴と認めてよいのではないかと考えている。

方形堅穴は、本文でも述べたように、平面形態は平安時代以前の堅穴住居址によく似ている。しかし、炉やカマドを持たないこと、出土する遺物に生活品が少ないと、更に覆土の観察から人為的に埋められたと考えられるものが多いことなどから墓壙と考えた方が良いと思われる。

地下式横穴について

本遺跡からは、13基の地下式横穴が検出されている。共通点として、開口部は1ヶ所で、足掛

けを持ち、単室の室部からなることを上げることが出来る。また、遺構に伴うと考えられる遺物の出土のないこともすべてに共通している。相違点としては、室部の規模や形態、方向に規則性が見られないことが上げられる。地下式横穴の用途については、最近の多くの調査例から墓であるとの考えにまとまりつつあるように見受けられる。しかし、本遺跡の地下式横穴は、規模に大きな差があることから、様々な用途に用いられたのではないかと考えられる。調査当初、土坑として扱っていた13号地下式横穴の様な、小さく浅い地下式横穴の存在が、逆に地下式横穴の用途を考える上で、参考になるのではなかろうか。

土間状遺構について

本遺跡からは、3基の土間状遺構が検出されている。土間状遺構には何らかの上屋があったと考えられる。そこで、遺構内と遺構の周辺で、遺構に伴う柱穴を検出するための精査を行った。数個の柱穴を検出することは出来たが、遺構との位置関係から、遺構に伴うものと考えるのには疑問が残るものばかりであった。そのため、土間状遺構が遺跡内でどのような空間であったのかは分らない。遺構の所属時期については出土遺物が少ないため、はっきりしたことは言えない。

1号土間状遺構から内耳土器片、3号土間状遺構から内耳土器片・石鉢が出土している。遺物は共に中世の所産であること、更に他の時期と思われる遺構が本遺跡において極めて少ないとから、1・3号土間状遺構は中世に属すると考えられる。2号土間状遺構の所属時期は、遺構内から近世陶磁器片が出土していることから新しい時期のものとも考えられる。出土遺物は1点だけであり、後から流れ込んだと考えたほうが良いようにも思われ、本遺構を含めた3基すべてに中世の時期を考えておきたい。

土坑について

本遺跡からは、190基の土坑が検出されている。形態や規模は様々であるが、ここでは特に長方形あるいは隅丸長方形とした土坑について述べてみたい。平面形態が長方形あるいは隅丸長方形となる土坑は75基あるが、その内長軸が南北方向を向くものが40基、東西方向を向くものが35基とほぼ同じ数字を示すが、長軸方向の北からの角度が $25\sim70^{\circ}$ のものは4基だけと少なく、ほとんどが東西または南北のどちらかを向いていることが理解される。この土坑に見られる方向性の2者は、方形竪穴でも同じことが言えそうで、東西に長い3・5号方形竪穴に対し、南北に長い4号方形竪穴が見られるなど、共通点が多い。この東西あるいは南北に長い方形竪穴と土坑が、比較的近い時期になるととも考えられるが、どちらも遺物量が極めて少なく、検証出来なかった。

新旧関係の明らかな土坑の長軸方向を比較してみると、30例の内、長軸が南北を示すもの同志で重複しているものが8例、東西を示すもの同志で重複しているものが5例ある。その他の17例が長軸が南北を示す土坑と東西を示す土坑の重複であるが、南北を示す土坑が東西を示す土坑よりも新しいものが9例、東西を示す土坑の方が新しいものが8例で、ほとんど同数であった。

土坑には長方形あるいは隅丸長方形を呈する土坑以外にも様々な形態の土坑が検出されている。土坑の多くは重複しており、土坑が長い期間にわたって作られ続けてきたことが窺われるが、形

態と切り合い関係によって、新旧関係があるか見てみたい。形態が異なり、更に新旧関係が明らかな組合せは12例ある。最も多い組合せは隅丸方形と隅丸長方形で、8例ある。隅丸方形の土坑が新しいものが4例、古いものが4例と同数であった。楕円形と隅丸長方形の土坑の組合せは1例で、楕円形の土坑の方が新しい。円形と隅丸方形の土坑の組合せは1例で、円形の土坑の方が新しい。円形と隅丸長方形の土坑の組合せは2例で、円形土坑の方が新しいものが1例、古いものが1例であった。以上から、土坑の長軸方向や平面形態によって、新旧を考えることは、非常に難しいと思われる。

ピットについて

本遺跡からは821のピットが検出されている。土坑の底面に掘り込まれているものも多いが、土坑の周辺にも多数のピットがあることから、そのほとんどは土坑に伴うものではなく、掘立柱建物址や柵を構成するピットと考えたほうが良いと思われる。この時期については遺物の出土したピットが22と極めて少ないとから、速断を避けねばならないが、多くは遺物から見て中世に属するものと考えて差し支えないものと思われる。調査ではこれらのピットについて、配列・規模の共通性に着目したが、明確な組合せを見つけることは出来なかった。更に整理作業において、図面からも掘立柱建物址や柵の配列について検討した。掘立柱建物址になると思われる組合せも數基あったが、その棟方向は方形豎穴や土坑の軸方向と外れたものであった。ピットの数があまりにも多く、作業は困難かと思われるが、今後も抽出作業を継続していきたい。

神垣外遺跡の性格について

掘立柱建物址が明確に把握出来ない段階で、本遺跡の性格を述べることは、充分ではないことを承知の上で、本遺跡の全体像を眺めてみると、遺構の多くは、土間状遺構や多数のピットからなる掘立柱建物址に中世の人々の生活の痕跡を僅かに認めるものの、方形豎穴・地下式横穴・土坑といった葬送儀礼に関わる遺構が中心であると考えられる。

神垣外遺跡は、発掘当初から田沢村の古い村落形態を表すものと考えていた。方形豎穴も炉やカマドは検出されないものの、住居址の可能性が高く、本遺跡内で住居と墓地が、まとまる一つの村落形態を示すものと思われた。しかし、方形豎穴も墓壙ではないかとの考えに至り、現在では田沢村の村落は現在の集落と同じ位置にあり、本遺跡内は葬送儀礼に関わる墓地の性格が強い空間であると考えている。この空間が本遺跡に隣接する墓地に移動していくことになると考えられるが、その時期については、遺物の出土が極めて少ないとあって、明確に出来ない。

本遺跡出土の遺物が極めて少ないと何回も述べたが、その中で年代はある程度明らかに出来るものとして内耳土器、錢貨がある。内耳土器はその形態から15世紀の所産と考えられる。また、本遺跡出土の錢貨の中で、初鑄年代が最も新しいものは永樂通寶の1408年である。このことから本遺跡が15世紀代までは継続していたと理解される。

(小池・小林)

参考文献

- 小山岳夫 1987 「大井城跡の竪穴状遺構」『長野県考古学会誌』54
- 竹原 学 1989 「1) 竪穴状遺構」『松本市島立条里的遺構III－県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』松本市文化財調査報告No.70 松本市教育委員会
- 野村一寿 1990 「第3章 遺構・遺物の考察 第3節 中世竪穴住居址」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 野村一寿 1990 「第3章 遺構・遺物の考察 第6節 中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 宮坂 清 1990 「殿村遺跡・東照寺址遺跡－長野県諏訪郡下諏訪町殿村・東照寺址遺跡発掘調査報告書－」下諏訪町教育委員会
- 小山岳夫・堤 隆 1985 「鉢師原遺跡群 野火付遺跡－長野県北佐久郡御代田町野火付遺跡発掘調査報告書」御代田町教育委員会
- 気賀沢進 1990 「第II章 調査遺構 第3節 遊光遺跡」『駒ヶ根東部地区県営ほ場整備事業埋蔵文化財緊急発掘調査 反日・遊光・殿村・小林遺跡』上伊那地方事務所・駒ヶ根市教育委員会
- 鶴柄俊夫 1986 「長野県の中世集落遺跡」『長野県考古学会誌』50
- 中田 英 1977 「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』2号
- 半田堅三 1979 「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』2
- 伊藤智樹 1986 「土壙群を伴う竪穴状区画について－台地整形区画に関連して－」『研究連絡誌』第17号 (財)千葉県文化財センター
- 山梨県教育委員会 1988 「金生遺跡I(中世編)－県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第39集
- 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1982 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市 その5－昭和52・53年度」
- 樋口誠司 1991 「第四編 中世 第一章 考古資料より見た中世」『富士見町史 上巻 本文編』 富士見町

第1表 地下式噴穴一覧表

第2表 土坑一覧表(1)

番号	通路番号	位置	断面形	半長	半幅	底長	底幅	深さ	側方傾斜	底面	底幅	深さ	側方傾斜	底面	底幅	深さ	側方傾斜	底面	底幅
1	—	南門	直角	163	47	144	44	32	34	N7W	2階と底層、新旧不明	17	N25W	17	N25W	2階と底層、新旧不明	17	N25W	17
2	—	不規則	直角	160	39	49	17	35	35	N7W	2階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	2階と底層、新旧不明	32	N25W	32
3	—	南門脇	直角	160	18	44	95	10	87W	2階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	2階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
4	—	不規則	直角	173	38	52	95	19	72W	ピット2と底層	32	N25W	32	N25W	ピット2と底層	32	N25W	32	
5	—	南門脇	直角	155	29	41	111	21	18W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32	
6	—	南門脇	直角	163	19	39	138	16	11W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32	
7	—	南門脇	直角	154	20	53	94	32	N7E	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
8	—	南門脇	直角	154	28	53	107	30	N7E	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
9	—	南門脇	直角	159	39	42	15	13	13W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
0	—	南門脇	直角	177	57	160	25	66	23	60S	ピット2と底層	32	N25W	32	N25W	ピット2と底層	32	N25W	32
1	—	南門脇	直角	110	20	50	58	33	25	N28W	ピット2と底層	32	N25W	32	N25W	ピット2と底層	32	N25W	32
2	—	南門脇	直角	160	20	50	58	33	25	N28W	ピット2と底層	32	N25W	32	N25W	ピット2と底層	32	N25W	32
3	—	南門脇	直角	171	42	58	33	43	27	N	ピット2と112土と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット2と112土と底層、新旧不明	32	N25W	32
4	—	南門脇	直角	167	51	55	43	27	N	ピット2と112土と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット2と112土と底層、新旧不明	32	N25W	32	
5	—	南門脇	直角	151	21	17	108	104	15	N5SW	ピット2と112土と底層	32	N25W	32	N25W	ピット2と112土と底層	32	N25W	32
6	—	南門脇	直角	121	17	18	116	12	0	N7SW	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
7	—	南門脇	直角	124	18	18	116	12	0	N7SW	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
8	—	南門脇	直角	171	176	141	111	27	84W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32	
9	—	南門脇	直角	170	104	94	104	32	56	N3W	ピット2と底層	32	N25W	32	N25W	ピット2と底層	32	N25W	32
10	—	南門脇	直角	187	157	88	142	15	5	N5E	ピット3と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット3と底層、新旧不明	32	N25W	32
11	—	南門脇	直角	164	51	51	120	15	5	N5E	ピット3と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット3と底層、新旧不明	32	N25W	32
12	—	南門脇	直角	167	36	50	120	15	5	N5E	ピット3と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット3と底層、新旧不明	32	N25W	32
13	—	南門脇	直角	171	13	66	66	13	13W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
14	—	南門脇	直角	222	27	91	114	22	N80W	ピット3と底層	32	N25W	32	N25W	ピット3と底層	32	N25W	32	
15	—	南門脇	直角	188	83	67	30	30	25W	ピット2と底層	32	N25W	32	N25W	ピット2と底層	32	N25W	32	
16	—	南門脇	直角	187	46	75	38	18	9W	ピット5と底層	32	N25W	32	N25W	ピット5と底層	32	N25W	32	
17	—	南門脇	直角	167	47	52	38	18	9W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32	
18	—	南門脇	直角	171	57	97	57	37	37	N8W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
19	—	南門脇	直角	171	57	97	57	37	37	N8W	ピット3と30Wと底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット3と30Wと底層、新旧不明	32	N25W	32
20	—	南門脇	直角	171	57	97	57	37	37	N8W	ピット3と30Wと底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット3と30Wと底層、新旧不明	32	N25W	32
21	—	南門脇	直角	214	57	97	57	32	70W	ピット3と30Wと底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット3と30Wと底層、新旧不明	32	N25W	32	
22	—	南門脇	直角	194	62	99	88	17	30S	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
23	—	南門脇	直角	188	113	114	97	32	59W	3階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	3階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
24	—	南門脇	直角	186	51	62	44	14	14W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
25	—	南門脇	直角	186	51	62	44	14	14W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
26	—	南門脇	直角	187	46	75	38	18	9W	ピット5と底層	32	N25W	32	N25W	ピット5と底層	32	N25W	32	
27	—	南門脇	直角	187	46	75	38	18	9W	ピット5と底層	32	N25W	32	N25W	ピット5と底層	32	N25W	32	
28	—	南門脇	直角	187	47	52	38	18	9W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32	
29	—	南門脇	直角	187	57	97	57	37	37	N8W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
30	—	南門脇	直角	187	57	97	57	37	37	N8W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
31	—	南門脇	直角	187	57	97	57	37	37	N8W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
32	—	南門脇	直角	187	57	97	57	37	37	N8W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
33	—	南門脇	直角	186	51	62	44	14	14W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
34	—	南門脇	直角	186	51	62	44	14	14W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	1階と底層、新旧不明	32	N25W	32	
35	—	南門脇	直角	187	57	97	57	37	37	N8W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
36	—	南門脇	直角	186	53	93	29	12	16W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
37	—	南門脇	直角	183	12	31	16	7	16W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
38	—	南門脇	直角	159	33	50	23	7	16W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
39	—	南門脇	直角	224	31	96	22	10	16W	ピット5と底層	32	N25W	32	N25W	ピット5と底層	32	N25W	32	
40	—	南門脇	直角	237	33	11	109	30	11W	ピット2と156土と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット2と156土と底層、新旧不明	32	N25W	32	
41	—	南門脇	直角	183	12	31	16	7	16W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
42	—	南門脇	直角	176	73	64	161	32	16W	ピット2と156土と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット2と156土と底層、新旧不明	32	N25W	32	
43	—	南門脇	直角	189	66	74	154	10	16W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
44	—	南門脇	直角	187	57	97	57	37	37	N8W	ピット1と底層	32	N25W	32	N25W	ピット1と底層	32	N25W	32
45	—	南門脇	直角	182	63	64	94	26	16W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
46	—	南門脇	直角	182	31	96	13	13	16W	1階と底層	32	N25W	32	N25W	1階と底層	32	N25W	32	
47	—	南門脇	直角	219	70	232	57	67	82W	ピット2と156土と底層、新旧不明	32	N25W	32	N25W	ピット2と156土と底層、新旧不明	32	N25W	32	

土坊一覧表(2)

番号	種類	位置	平面形	断面形	平幅	底幅	底長	底幅	深さ	幅	高さ
48	一・5・6	不明	平四形	不明	158	135	135	23	N10E	47・5	1・5
49	1・5・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	157	140	133	30	N12W	50・5	1・5
50	1・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	209	40	36	24	N12W	52・5	1・49
51	1・4・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	178	32	38	24	N18E	52・5	1・49
52	1・4・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	269	36	50	33	N18E	52・5	1・49
53	1・4・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	167	31	47	30	N16E	52・5	1・49
54	1・4・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	130	28	35	32	N14W	52・5	1・49
55	1・4・6	不規形	直方	直方	25	13	12	94	N12W	52・5	1・49
56	1・4	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	87	68	65	145	N10W	52・5	1・49
57	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	132	22	16	107	N15W	52・5	1・49
58	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	113	27	31	92	N17E	59・5	1・49
59	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	203	62	188	45	N10W	52・5	1・49
60	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	156	35	32	29	N12W	52・5	1・49
61	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	114	91	97	87	N15E	52・5	1・49
62	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	117	96	104	84	N12W	52・5	1・49
63	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	87	76	75	12	N13E	52・5	1・49
64	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	136	12	18	97	N12E	52・5	1・49
65	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	162	22	11	87	N15E	52・5	1・49
66	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	36	68	11	57	N21E	52・5	1・49
67	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	63	68	21	62	N16E	52・5	1・49
68	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	60	12	40	23	N19W	52・5	1・49
69	1・5	馬頭瓦	馬頭瓦	直方	173	96	105	65	N17W	52・5	1・49
70	H・6・7	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	106	94	8	N11E	52・5	1・49	
71	H・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	23	76	92	64	N10W	52・5	1・49
72	G・H・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	23	26	22	22	N33W	52・5	1・49
73	G・H・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	155	45	40	124	N23	52・5	1・49
74	G・H・5・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	146	12	24	95	N33W	52・5	1・49
75	G・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	70	69	35	50	N20	52・5	1・49
76	G・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	116	16	95	8	N23	52・5	1・49
77	G・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	152	15	41	103	N26	52・5	1・49
78	H・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	159	71	55	18	N1	52・5	1・49
79	H・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	169	11	62	107	N1	52・5	1・49
80	H・5	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	127	88	18	75	N1	52・5	1・49
81	H・6・7	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	225	61	206	225	N33W	52・5	1・49
82	G・H・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	225	165	93	144	N19W	52・5	1・49
83	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	149	25	26	10	N33W	52・5	1・49
84	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	169	29	43	103	N13E	52・5	1・49
85	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	174	48	50	39	N	52・5	1・49
86	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	162	52	154	157	N	52・5	1・49
87	G・5・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	178	32	188	187	N	52・5	1・49
88	G・5・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	190	37	173	117	N	52・5	1・49
89	G・5・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	69	19	33	102	N	52・5	1・49
90	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	99	16	68	94	N	52・5	1・49
91	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	97	95	65	60	N	52・5	1・49
92	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	174	2	2	2	N	52・5	1・49
93	G・6	馬頭瓦刀形	馬頭瓦	直方	97	95	65	60	N	52・5	1・49

土坑一覽表(3)

番号	土壤類別	名	面積	平均長	平均幅	深さ	底面形	地質	透視	動力向	地質記号	測定者	測定日
95	P - 6	圓柱形	圓柱	243	17	150	圓柱	風化帶	1.7	N	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50	1. 地下水、1.5 土、1.5 植物、1.5 不透
96	G - 6	圓柱形	圓柱	171	12	146	圓柱	風化帶	1.5	N	77W	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
97	G - 6	圓柱形	圓柱	177	12	146	圓柱	風化帶	1.5	N	87W	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
98	G - 6	圓柱形	圓柱	115	12	104	圓柱	風化帶	1.5	N	84W	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
99	G - 6	圓柱形	圓柱	163	153	140	圓柱	風化帶	1.5	N	85W	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
100	G - 6	圓柱形	圓柱	96	57	81	圓柱	風化帶	1.5	N	80W	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
101	G - 6	圓柱形	圓柱	145	63	144	圓柱	風化帶	1.5	N	115	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
102	G - 6	圓柱形	圓柱	125	21	104	圓柱	風化帶	1.5	N	115	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
103	G - 6	圓柱形	圓柱	77	67	65	圓柱	風化帶	1.5	N	115	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
104	G - 6	圓柱形	圓柱	127	112	116	圓柱	風化帶	1.5	N	115	ピット 3 : 07	4. ピット 1 : 50
105	G - 6	圓柱形	圓柱	237	168	214	圓柱	風化帶	1.5	N	6E	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
106	G - 7	圓柱形	圓柱	88	91	76	圓柱	風化帶	1.5	N	52W	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
107	G - 7	圓柱形	圓柱	92	69	82	圓柱	風化帶	1.5	N	8	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
108	G - 7	圓柱形	圓柱	179	145	152	圓柱	風化帶	1.5	N	85W	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
109	G - 7	圓柱形	圓柱	210	243	43	圓柱	風化帶	1.5	N	72W	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
110	P - 5	圓柱形	圓柱	179	166	158	圓柱	風化帶	1.5	N	89W	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
111	P - 5	圓柱形	圓柱	125	131	110	圓柱	風化帶	1.5	N	192	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
112	P - 5	圓柱形	圓柱	157	152	137	圓柱	風化帶	1.5	N	162	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
113	P - 5	圓柱形	圓柱	156	152	137	圓柱	風化帶	1.5	N	132	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
114	P - 5	圓柱形	圓柱	164	61	146	圓柱	風化帶	1.5	N	115	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
115	P - 5	圓柱形	圓柱	152	125	103	圓柱	風化帶	1.5	N	97	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
116	P - 5	圓柱形	圓柱	131	110	110	圓柱	風化帶	1.5	N	10	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
117	P - 5	圓柱形	圓柱	138	114	118	圓柱	風化帶	1.5	N	100	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
118	P - 5	圓柱形	圓柱	117	96	77	圓柱	風化帶	1.5	N	118	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
119	P - 5	圓柱形	圓柱	128	87	68	圓柱	風化帶	1.5	N	74	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
120	P - 5	圓柱形	圓柱	160	144	144	圓柱	風化帶	1.5	N	135	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
121	P - 5	圓柱形	圓柱	126	123	115	圓柱	風化帶	1.5	N	97	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
122	P - 5	圓柱形	圓柱	200	178	142	圓柱	風化帶	1.5	N	122	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
123	P - 5	圓柱形	圓柱	114	98	94	圓柱	風化帶	1.5	N	89W	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
124	P - 5	圓柱形	圓柱	125	126	110	圓柱	風化帶	1.5	N	25	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
125	P - 5	圓柱形	圓柱	126	74	58	圓柱	風化帶	1.5	N	35	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
126	P - 5	圓柱形	圓柱	116	96	88	圓柱	風化帶	1.5	N	2	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
127	P - 5	圓柱形	圓柱	140	23	26	圓柱	風化帶	1.5	N	85W	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
128	P - 5	圓柱形	圓柱	151	110	27	圓柱	風化帶	1.5	N	113	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
129	P - 5	圓柱形	圓柱	102	97	88	圓柱	風化帶	1.5	N	76	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
130	P - 5	圓柱形	圓柱	205	35	83	圓柱	風化帶	1.5	N	115	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
131	P - 5	圓柱形	圓柱	223	113	102	圓柱	風化帶	1.5	N	90	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
132	P - 5	圓柱形	圓柱	336	31	15	圓柱	風化帶	1.5	N	19	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
133	P - 5	圓柱形	圓柱	339	39	29	圓柱	風化帶	1.5	N	89W	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
134	P - 5	圓柱形	圓柱	98	91	87	圓柱	風化帶	1.5	N	76	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
135	P - 5	圓柱形	圓柱	336	115	116	圓柱	風化帶	1.5	N	125	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
136	P - 5	圓柱形	圓柱	97	85	82	圓柱	風化帶	1.5	N	74	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
137	P - 5	圓柱形	圓柱	131	122	77	圓柱	風化帶	1.5	N	67	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
138	P - 5	圓柱形	圓柱	50	49	27	圓柱	風化帶	1.5	N	25	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
139	P - 5	圓柱形	圓柱	42	12	39	圓柱	風化帶	1.5	N	98	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
140	P - 5	圓柱形	圓柱	114	114	114	圓柱	風化帶	1.5	N	140	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透
141	P - 5	圓柱形	圓柱	140	140	140	圓柱	風化帶	1.5	N	140	ピット 3 : 04	4. 土、1.5 植物、1.5 不透

土坑一覽表(4)

十一、岩类(5)

番号	清掃概要	位置	平面形	断面形	平均	底板	側板	輪	方角	規格	備考
189 上部 上段	I - 3	底板之方形	不規	93	98	123	87		N 108	147 ± 48 土と混じ、重10kg	
190 上段	H - 6	円形	不明	65	65	70			N 87W	271 - 73 ± 80 土と混じ、重10kg	

第3表 這樣別出土遺物一覽表(1)

遺構別出土遺物一覽表(2)

遺構別出土遺物一覧表(3)

遺構別出土遺物一覽表(4)

逐件列出上述物一覽表(5)

編號	遺物種類	內耳	耳模	紗布	紗布	繩子	青繩	天目	真珠	白	石珠	鑲石	圓石	圓物	白	青繩	紗布	刀子	竹質圓刀	貝貝	編織	編織	打繩	黑繩	瓦片
153	玉	4																							
154	玉	1																							
155	玉	1																							
156	玉																								
157	玉																								
158	玉																								
159	玉																								
160	玉																								
161	玉																								
162	玉																								
163	玉																								
164	玉																								
165	玉																								
166	玉																								
167	玉																								
168	玉																								
169	玉																								
170	玉																								
171	玉																								
172	玉																								
173	玉																								
174	玉																								
175	玉																								
176	玉																								
177	玉																								
178	玉																								
179	玉																								
180	玉																								
181	玉																								
182	玉																								
183	玉																								
184	玉																								
185	玉																								
186	玉																								
187	玉																								
188	玉																								
189	玉																								
190	玉																								
1	玉	2																							
2	玉	2																							
3	玉	2																							
4	玉	2																							
5	玉	2																							
6	玉	2																							
7	玉	2																							

遺構別出土遺物一覽表(6)

第4表 遺物観察表(1)

図番号	種別	器種	口径	底径	器高	遺構番号
28-1	灰釉陶器	皿	11.7	6.9	2.2	173号土坑
28-2	灰釉陶器	塊		7.8		11号地下式横穴
28-3	青磁	塊	16.8			3号方形堅穴
28-4	青磁	塊	16.3			114号土坑
28-5	青磁	塊			5	56号土坑
28-6	天目	塊	11.8			82号土坑
28-7	黄瀬戸	塊	15.8			82号土坑
28-8	土師質	捏鉢	30.2			2号地下式横穴
28-9	土師質	内耳土器	32	27.6	20.2	2号地下式横穴
28-10	土師質	内耳土器	32.8	26.8	23	2号地下式横穴
28-11	土師質	内耳土器	33	27.2	22.8	2号地下式横穴
28-12	土師質	内耳土器				122号土坑
28-13	土師質	内耳土器				4号地下式横穴
28-14	土師質	内耳土器				2号地下式横穴
28-15	土師質	内耳土器				3号方形堅穴
28-16	土師質	内耳土器				75号土坑
28-17	土師質	内耳土器				177号土坑
28-18	土師質	内耳土器				2号地下式横穴
28-19	土師質	内耳土器				76号土坑
28-20	土師質	内耳土器				42号土坑
28-21	土師質	内耳土器				ピット4
28-22	土師質	内耳土器				81号土坑
28-23	土師質	内耳土器				74号土坑
28-24	土師質	内耳土器				91号土坑
28-25	土師質	内耳土器				8号土坑
28-26	土師質	内耳土器				82号土坑
28-27	土師質	内耳土器				2号地下式横穴
28-28	土師質	内耳土器				82号土坑
28-29	土師質	内耳土器				6号地下式横穴
28-30	土師質	内耳土器				麦稭
28-31	土師質	内耳土器				9号土坑
28-32	土師質	内耳上盤				9号地下式横穴
28-33	土師質	内耳土器				3号方形堅穴
28-34	土師質	内耳土器				139号土坑
29-1	土師質	カワラケ	7.1	5.8	0.8	84号土坑
29-2	土師質	カワラケ		5.1		2号方形堅穴
29-3	土師質	カワラケ		5.8		88号土坑
29-4	土師質	カワラケ		5.8		6号地下式横穴
29-5	土師質	カワラケ		5.8		4号方形堅穴
29-6	土師質	カワラケ		5.9		71号土坑
29-7	土師質	カワラケ		6		47号土坑
29-8	土師質	カワラケ		6.1		ピット16
29-9	土師質	カワラケ		5.9		3号方形堅穴
29-10	土師質	カワラケ	9.6	7.6	1.9	4号地下式横穴
29-11	土師質	カワラケ	10.7	6.2	2.8	3号方形堅穴
29-12	土師質	カワラケ			6.9	9号地下式横穴

遺物観察表(2)

図番号	種別	器種	口径	底径	器高	遺構番号
29-13	土師質	カワラケ		6.8		133号土坑
29-14	土師質	カワラケ	10.3	7.8	2.6	82号土坑
29-15	土師質	カワラケ		7		11号地下式横穴
29-16	土師質	カワラケ		6.6		92号土坑
29-17	土師質	カワラケ		6.8		25号土坑
29-18	土師質	カワラケ		6.9		4号方形堅穴
29-19	土師質	カワラケ		7		4号方形堅穴
29-20	土師質	カワラケ		6.9		53号土坑
29-21	土師質	カワラケ	12.2	8	2.7	4号方形堅穴
29-22	土師質	カワラケ		6.9		2号方形堅穴
29-23	土師質	カワラケ		7.2		91号土坑
29-24	土師質	カワラケ	12.7	7.6	2.4	39号土坑
29-25	土師質	カワラケ		7.5		4号方形堅穴
29-26	土師質	カワラケ		8.3		105号土坑



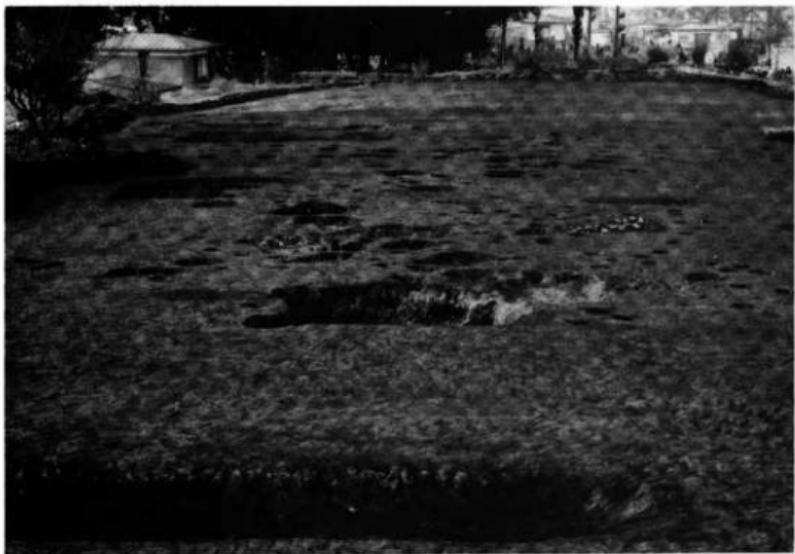
1 試掘調査風景



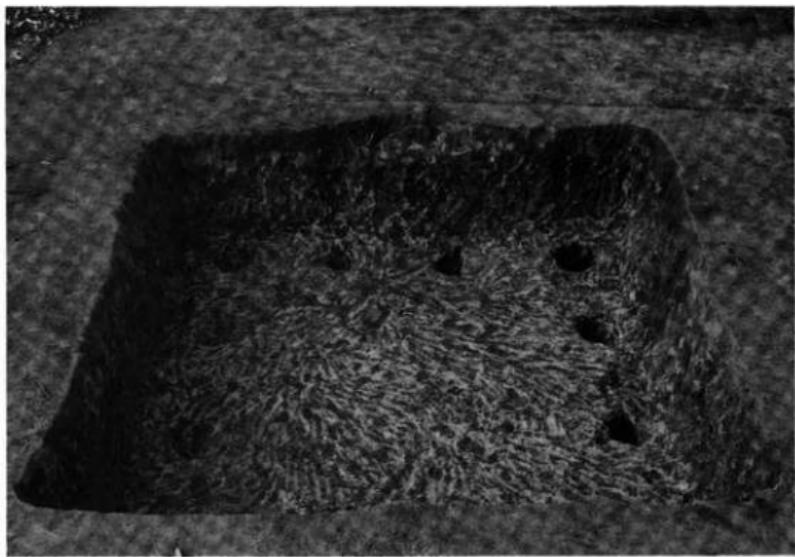
2 遺構検出状態



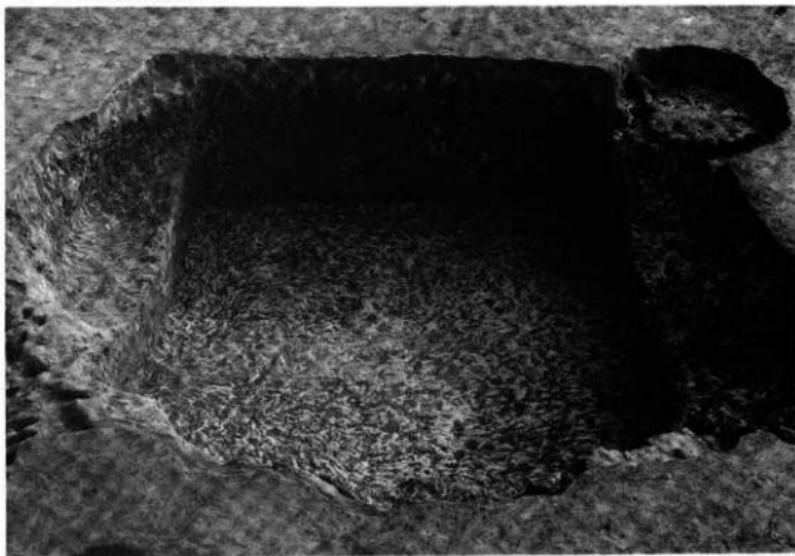
1 遺跡全景（西から）



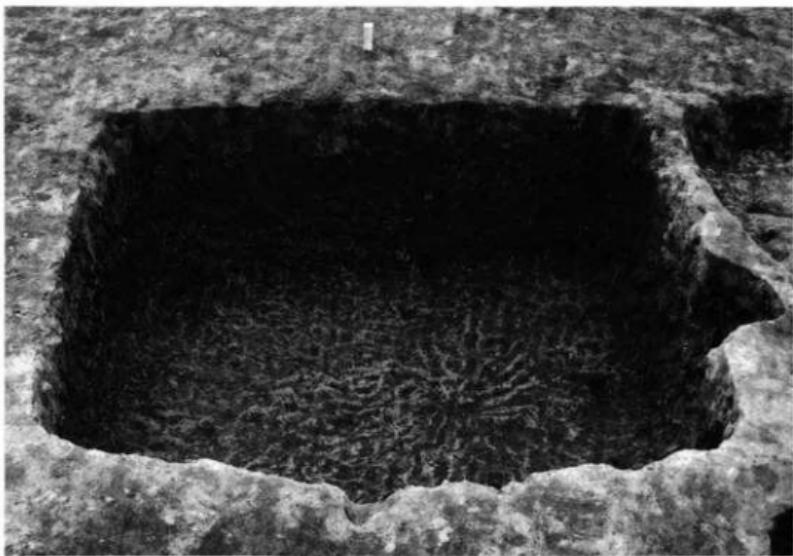
2 遺跡全景（東から）



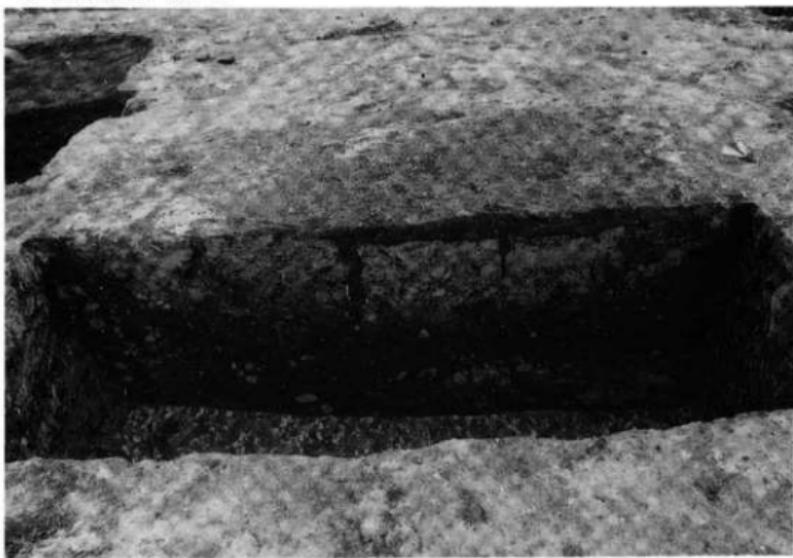
1 1号方形豎穴（東から）



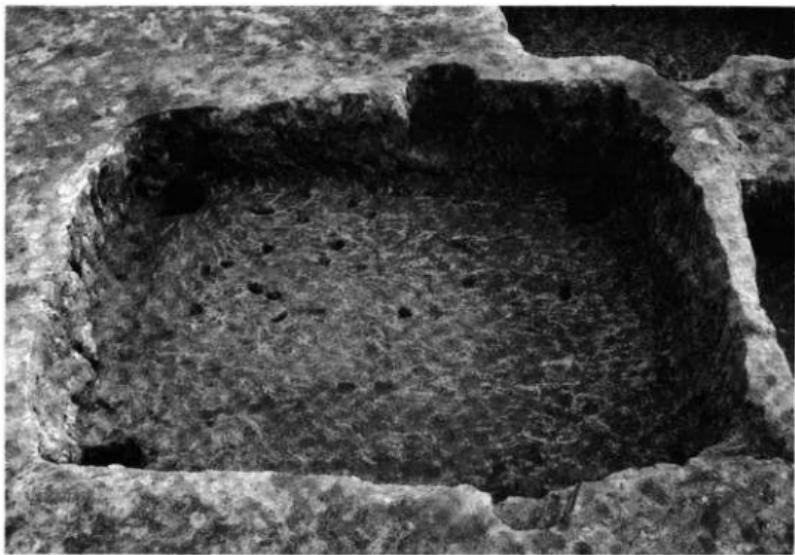
2 2号方形豎穴（西から）



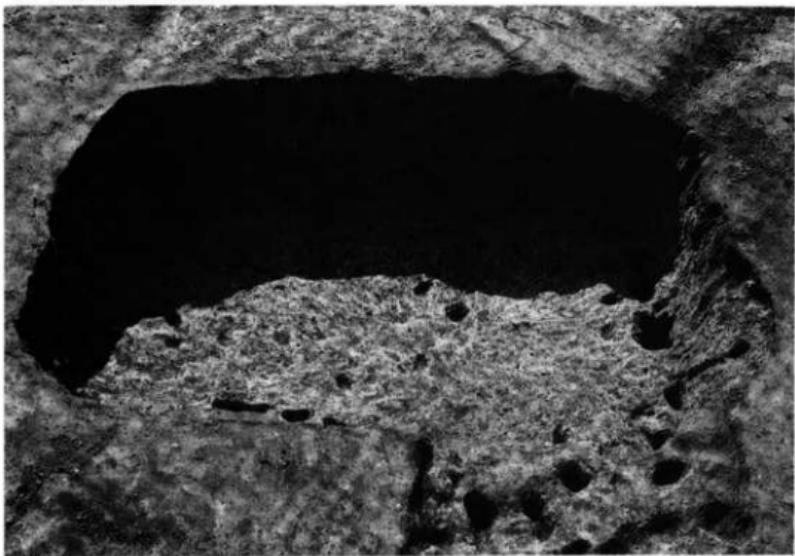
1 3号方形豈穴（北から）



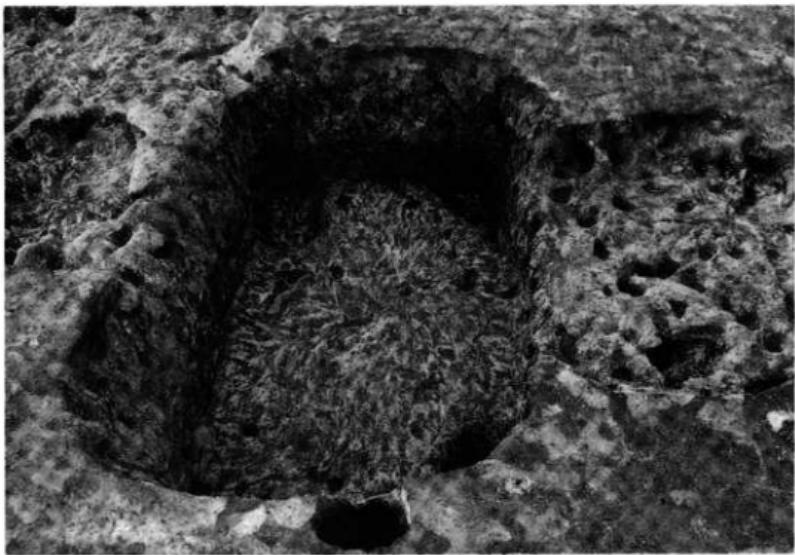
2 3号方形豈穴（南から）



1 4号方形竪穴（西から）



2 5号方形竪穴（北から）



1 82号土坑（西から）



2 遺跡見学会

神垣外遺跡

— 団体営土地改良総合整備事業山沢地区に伴う —
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月24日 発行

編集長 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発行 茅野市教育委員会

印刷 はおづき書籍株式会社
